

ふるさと 霞ヶ浦を中心とした周辺地域の歴史文化の再発見と創造を考える

ふるさと風

第128号 (2017年1月)

風に吹かれて (106)

白井啓治

・流海に初日の昇り金色の柱建つ

元日の木村さんのブログに、歩崎の初日の出の写真が紹介されていた。毎年、今年こそは行ってみようと思っていたのであったが、未だ初日の出を褒めに行ったことはない。日中立寄る度に、ここでの初日の出を想像するのであったが、木村さんの写真を見て、想像に全く違わぬものであった。鹿島の森から昇ってくる日の出が霞ヶ浦に映し出す朝日の道は、この国の大黒柱といつてよいだろう。筑波山を削って霞ヶ浦を埋め立てようなどという馬鹿げたことを真剣に討議した、といったことを聞いたことがあったが、笑い話にもならぬ権力者たちの貧しく愚か過ぎる発想である。

貧しく愚かで思い出したのだが、昨年暮れに、フェイスブックの友人である岩崎駿介兄が、『：一つだけ言わせてもらえば「醜いもの」「汚いもの」を世の中に作ってはいけません。：(略)：奇麗なものこそ人生です。地球を冒瀆してはならず、作るなら奇麗なものを：』と書かれていた。もしも、霞ヶ浦を筑波山を崩して埋め立てていたらと想像すると空恐ろしいものであるが、この市の霊山と言える山を採石業者に売却したのだというか

ら大した魂消たものだ。

さて当紙も昨年十周年を迎え、一山を超えた。

当紙の始まりである民話ルネサンス講座の講師を引き受ける時に、市民プロの育成という概念を掲げてたのであったが、十年を迎えて小さいながらもかなりとふるさとを主張できる市民プロ集団が出来上がってきたかなと手前味噌で思っている。

しかし、重要なのは次の十年の山登りをどうするかであるが、私自身が一緒に次の峠を越せるかは不問にして、種まき位はしておかなければと思いつながら、年の暮れに計を図ってみた。

各地の友人・知人の言うには、元氣のある町は文化度・芸術度が高いという。お店や住宅の片隅を借りて、空き地にテントを張ったりしての小さなイベントが頻繁に催されているという。人口の減少は全国どこも同じで、ミニホールとなる場所は沢山あり、それを生かすか生かさないうで元氣度が変わる。

昨年夏であった。新装オープンした「石岡そだち」で、全国落語旅を行っていた林家とんでん平氏が茨城にも行くので石岡でも場を作ってもらえないだろうか、と知人に頼まれ、野菜の陳列台の上に講座を設け行つたのであった。

「いやいや、先生魂消しましたな。色とりどりの野

菜に囲まれての高座、初めての経験でしたがコリヤアゝなかなかのものです」ととんでん平師匠は大ノリでの高座であった。

そう、こうした身近なイベントが町のあちこちで開かれると、市民の心も豊かになってくるだろう。この石岡市とその周辺地域には、多くの表現者の方々が暮らしている。そういう人達には、創造性のあるお洒落な場があれば快く賛同し、協力してくれるだろうと思う。

そんなことを思いながら、ふるさと風の会の次のステップは、ふるさと石岡「芸術・文化村」構想を持つての活動を展開させてみるのもいいだろうと思う。幸いなことに、風の会の姉弟会には劇団ことば座、兼平智恵子の風のことは絵同好会、伊東弓子が代表を務める御留川を歩く会があり、自前の活動もできる。特にことば座の小林幸枝が演じる手話舞は、この石岡に生まれた世界唯一の舞踏様式でもあるのだから、当会としても率先垂範の氣概を持つて展開できるであろうと思う。

当会の始まりである前身は「民話ルネサンス講座」であるが、昨年、木村進さんが石岡、茨城の伝承物語を小冊子にまとめることで、どうやら民話ルネサンスがやつと動き出した。

この整理された伝承民話を語り朗読用に脚色すれば、ふるさと民話語り会を聞くこともできるであらう。

岩崎兄の言う『「醜いもの」「汚いもの」を世の中に作ってはいけません。奇麗なものこそ人生です。』をそっくり戴いて、ふるさと石岡・芸術文化村づくりの第一歩を踏み出してみようと思う。そして、これを「ふるさと風の会」の第二ステップへの計としたいと考える。

酉年の初めに

兼平智恵子

謹んで新年のお慶びを申し上げます。
皆様にはご多幸な初春をお迎えの事と存じます。
旧年中は当「ふるさと風」をご愛読頂きまして誠に有難うございました。今年もどうぞよろしくお願いいたします。

・いろいろとりどり明るい年に

智恵子

昨年は愛読者の皆様の応援と励ましでお蔭様で創刊より十年を迎える事が出来ました。また石岡市市民協働のまちづくり功績者として表彰を受けました。皆様のお力添えに改めて御礼申し上げます。

大きな大きな喜びと励みになりました。更に次なる目標に向かって研鑽を積んで参りたいと思います。

酉について調べてみました。

酉の字は酒を醸す器の象形文字で「酒」の元の字で、口が小さく胴がふくらんでいる酒つぼの形にかたどる。十二支の「酉」は動物で表すと「鳥」ではなく「鶏」なのでニワトリのことを指します。

Ⅱ鶏にまつわる雑学・おもしろエピソードⅡより

酉の由来は、神様へのご挨拶に向かった十二支の動物の内、猿と犬の喧嘩を仲裁する為に、猿と犬に挟まれた十番の干支になったそうです。

十二支はそれぞれの月を示す時にも使われました。十番目の酉の月は酒作りの季節だから酉の字が使われたようです。

桃太郎の家来はなぜ猿・雉・犬なのか？ 猿・

雉・犬は干支の方位で「申・酉・戌」となり、鬼門と対峙する方向というわけで、鬼退治の象徴として用いられたのでした。

*北東方向が鬼門と呼ばれる理由は昔の中国が、北東方向から遊牧民やモンゴル人やロシア人に進攻を受けることが多かったからだそうです。

ニワトリは弥生時代に中国大陆から伝来したと言われていますが、採卵や食用というよりも、鳴き声で朝を告げる「時告げ鶏」として利用が主だったと考えられている。夜明け方、丑の刻（午前二時頃）に鳴くのを「一番鶏」、寅の刻（午前四時頃）に鳴くのを「二番鶏」という。元旦の鶏の第一声は「初鶏」といい、新春の季語になっている。

日本の文献で最初に登場するのは「古事記」で、天照大神が天の岩戸に隠れてしまい世界がことごとく闇になった時、八百万神が常世長鳴鳥を鳴かせて、天照大神を呼び出す話があります。この常世長鳴鳥が鶏Ⅱニワトリです。鶏はまさに天照大神や太陽を迎えるもので、神聖なものとされています。

やがて奈良・平安のころに闘鶏が行われるようになり、江戸時代には採卵・食用とされるようになって身近な生き物となりました。ニワトリの語源は、庭のトリだと言われている。

酉年にちなみまして皆様のご健康と更なる飛躍の年でありますようにお祈りしております。

最後になりましたが、昨年の暮れに石岡市まちかど情報センターにて行いました「ふるさと風の会展」にはたくさんの方のご高覧を頂きまして感激でございました有難うございました。

謹賀新年

小林幸枝

新年おめでとうございます。

昨年は、ふるさと風・劇団ことば座が無事10周年を迎えることが出来、またふるさと風の会が石岡市市民協働のまちづくり功績者として表彰を受けました。これも皆様方のあたたかいご支援のおかげと、改めてお礼申し上げます。

昨年暮れに、四十五年ぶりに大谷平和観音を見に出かけてきました。まだ子供だったので平和観音のあまりの大きさにびっくりしたことを思い出しました。大きく真つ白で美しい観音像だったことが印象的だったのですが、長年風雨の中に人々の平和を見守って来た疲れが出たのか、当時の白さが失われ、また大人になった所為もあって少し小さくなった感じがしました。

大谷平和観音は、太平洋戦争で亡くなった方々の供養と、世界平和を祈って製作されたもので、昭和三十一年に、日光輪王寺門跡、菅原大僧正により開眼供養が行われました。

現在は、宇都宮市の公園管理のもと自由に参詣できる憩いの場として、多くの人が訪れています。この日も、年末にも拘らず多くの人が訪れていました。

何かと不安なニュースばかりが目立った昨年でしたが、今年は自然災害や人間同士が殺し合うような悲劇の起こらない年である事を願うばかりです。観音様の穏やかな顔を見上げて合掌し、今年一年の平和を祈念し、帰ってきました。

「寛容」はいずれに

菅原茂美

新年早々ながら、今年も吼え続けざるを得ない。何故に世の中は、こうも諍いが多過ぎるのか？…人の本性とは、テロなど凶悪な争いに終始するよう、遺伝子にプログラムされているのか？…古今東西、多くの先哲・聖人が人の道を説いたのに、社会や国家間に、それが活用されていない。

あえて特別に善良な行動をとらなくとも、人様に迷惑をかけさえないければ、それほど大きな諍いにはならない筈。近年の日本は豊かになり、昔、貧しかった時代には、互いに助け合い、痛みを癒しあう事は当然の理としてきたが、豊かになった今は、逆に人心は乱れ、電話詐欺などあまりにも卑劣な犯罪が多すぎる。特に判断力の鈍ってきた老人を食い物にするなど、絶対に許せない。勿論世の乱れは、日本だけではない。むしろそれ以上に世界各地で甚だしい。政党や宗教の違いにより、寛容を失い、争いは絶えない。そして金持ちは、租税回避に悪智慧を働かす。

*

いずれの国の首脳も口を開けばまず「国益第一」。何とかの一つ覚えみたいになんて口にする。いかにグローバル化時代とはいえ、「保護主義」を全て排しては、国民の支持は得られまい。そうしなければ選挙で首脳には、なれないのだから…。しかし折角、地球は丸いのだから、そこに住む全世界が、もう少し丸く納まれないものだろうか。

されば、そもそも国境とは何ぞや…。紙の上に、欲張り共が力を込めて、線を引いただけのもの…ともいえる。その「線」を守るために、教育も福祉も犠牲にして多額の軍事費を投入する。世界各

国とも、軍事費ほどアホらしい支出はない。古今東西、変わらぬものは、慾の突っ張り合い。

さて渡り鳥は、人間の愚かさを嗤うようにトリインフルエンザなど、要らざる土産を毎年のようにぶら下げてやって来る。今冬も既に莫大な被害がでている。家畜なら、検疫というシステムがあるが、野鳥にとつては、「国境線」など超ナンセンス。宇宙飛行士なども、しみじみそう思っているに違いない。ただ彼等は利口だから、それを口に出さないだけ。小さな縄張り根性で、人類はいかほど大脳を膨らまして、「寛容の精神」など、さっぱり育つ気配はない。戦争の道具が大規模・高性能化するだけ。これではヒトという種の寿命も、そう長くはあるまい。

人類は直立二足歩行を初めて700万年。進化の過程で同じ道を歩んできたオランウータンやゴリラは、きわめて温厚な動物なのだから、少しは見習って、もうチョイ寛容な動物へと舵を切るべきではありませんか？と言いたい。同じ霊長類でも、どうしてチンパンジーと人類だけが、仲間同士殺し合いをする下等動物に進化したのか残念至極。一步譲って、互いに控え目の思考回路をとれば、多くの無駄が省け、地球環境も汚さずに済む。

今、そういう進路変更を図らなければ、未来の子孫から、なぜ21世紀の先祖達は、もう少し頭を働かせ、地球にやさしい方向転換を図らなかったのかと、攻められること、間違いない。

21世紀を迎えたというのに、世界各地で「内乱」やら、また宗教の違いによるISの活動をはじめ、世界中あちこちで戦火の止む時がない。

特に中国はケチな根性丸出しで、国際裁判所の裁定を無視し、領土拡大を狙うなど、開いた口が

塞がらない。あれだけの人口があるのだから、賢く徳のある人物もかなり生まれている筈。そういう人物を入獄や粛清では、世界から尊敬される大国にはなれない。なにしろ入獄中の平和運動活動家がノーベル平和賞に決定したら、犯罪人を表彰するノーベル賞などロクなものじゃない…と、授賞に行かせなかった。三権分立など常識と思っていたら、中国では司法さえ党の支配下にある。他国の領土を、小刻みに力で掠め盗る。これを誰が名付けたか、「サラミ・スライス」と言うそつだ。

*

さて世の中に「悪徳」は無限にあるが「差別」ほど人の心を傷つけるものはない。被害者は、小集団の一個人から、大きくは人種差別まである。白人は何を勘違いして、己の優性を謳い、有色人種を見下げるのか？ 白人は過去に世界中を荒らしまわり、平穩に暮らしていた原住民を蹂躪し、生命・財産をほしいままに奪い取った反省など、たまにはしているのだろうか。宗教の普及活動も、植民地化の布石のように見えてならない。

地球の人口収容能力は、50億人といわれるが、現在世界人口は73億人。毎年8500万人ずつ増えているので、今世紀末には確実に100億人を突破しそう。狭い場所ですべて人口が増えれば、必ずいざこざが発生し、人間の醜い本能「縄張り争い」が後を絶たない。何かと難癖をつけ、相手の弱体化↓自然消滅を狙う。もつと悪辣な手段は戦争に訴え、奴隷化・属国化を狙う。欲の深い寛容精神の薄い人間の考える事は、大方そんなところであろう。人の世の最大の悪徳「差別」について分析してみたい。我々の祖先は7万年前、アフリカから、アラビヤ半島に僅か150人ほどで渡ってきた黒人

の小集団。これが、現在の世界全人類の元祖である。それゆえ肌の色で差別するなど超ナンセンス。北方に進出した群れは白っぽくなり、中緯度に進んだ群れは黄色くなり、アフリカから出なかったか、或は出て再びアフリカに戻ったのが黒人。

人類発祥の地アフリカで、強い紫外線から身を守る（DNA破壊を防ぐ）ために、メラニン色素を増やした黒人先祖にこそ、感謝すべきである。それを蔑（さげす）むとは、非常識も甚だしい。

人類はいつまで経っても、肌の色がどうのこうので「寛容」の衣に包まれる事はなく、明けても暮れてもいがみあう。あまりにも狭量で、排他的な人類の狡猾・無能さに腹が立つ。

人類はもう少し太っ腹で、みんな仲良くなれないものか。白人のすべてが…とは言わないが、我慾が強く自己主張が激しく、隙あらば他人の物でも何でも奪い取る。山賊・海賊の典型であり、包容力のある仏教徒などから見たら、醜い限りである。その証拠に、自己防衛とか何とか言って、銃の所持が不可欠…とは、あまりにも情けなく、超危険な社会である。いつ他人に強奪されるか分からないから…と常に考えるのは、自分も、そうなる可能性があるから…との裏返し。

現在のアメリカでは、銃乱射事件などあまりにも多いので、オバマ政権が銃規制を推進しようとしたら、圧倒的差で秘訣された。何しろ現在のアメリカは、口で世界平和を唱え、現実には武器を売って己の利を得ている。コンビニの数より銃販売店の数の方が多いという。

*

「侵略」これも最大級の悪徳だ。白人は武力・財力にものを言わせ、世界の各地をいかほど荒らし

廻った事か？ 特に南北米大陸・オセアニア・アフリカ・アジア各地など、白人の毒牙にかかった原住民は、いかほどいたことか？ 南北アメリカ大陸には、コロンブス以前は、9000万人の原住民が住んでいたが、その9割を殺害し、土地や財産を奪ったという。

過日、テレビでナバホ居留地のネイティブアメリカンの世界観をリポーターが訪ねていたが、人類も自然の一部であり、宇宙とつながっている…とはつきり認識している達観には、頭が下がる。

日本のアイヌと同じ世界観である。自然界の資源は、今俺が取らねば誰かに先に奪われる。先手必勝とばかりに、自然を荒らしまわる。謙虚な先住民と、文明(?)の利器を駆使した白人の狡猾な態度とは雲泥の差がある。そのように、優れたインディアンを、窮屈なところに押し込め、大陸を奪った白人の暴挙を私は許せない。

日本でも大陸から弥生人が大挙して押し寄せてきて、大和朝廷とやらを造り、統一という名のもとに、東北地方の先住民を虐殺し、権力をほしいままに掌握した事実は、酷い話。坂上田村麻呂の出世など、とんでもない歴史の汚点である。そして幕末期、太平洋のクジラを絶滅寸前まで乱獲したのはアメリカである。ペリーが日本に開国を迫ったのは、なんちゆう事はない。捕鯨船団に新鮮な野菜と真水が欲しかっただけの話。それを今、日本が、商業捕鯨をしていると、シーシェパードなどが騒いでいる。己の過去の「非道」は棚に上げ、目の前の現実を激しく攻撃する。

*

「他人の罪過を厳しく責めない…」というのが、キリスト教の重要な徳目らしい。

しかし、現代のグローバル化時代にあつて、国際競争は激しく、自己優先主義(フライオリティ)が、生き残るための必須要件となった。先のアメリカの次期大統領選において、最後に残った二人のやり取りなど、目を覆いたくなるような応酬であつた。キリスト教が主体の米国において、しかも国家の最高指導者を選ぶ選挙において、あのように下品な争いでは勝つたとしても、とても世界のリーダーとして尊敬を集めるわけにはいかないであろう。針で突つくような相手の欠点探し。醜いこと限りなし。しかし、あれほどの暴言を吐きっぱなしの方が勝利するというのだから、国民も日頃、移民に職場を奪われるなど、相当のストレスを抱えており、代弁者として、選択せざるを得なかったのであらうか。

キリスト教に限らず、どんな宗教でも、人類が真の「万物の霊長」と言われたいのなら、小異を捨て、大きな包容力で纏まていくことが重要な要件であらう。まして世界最大の信者数を誇るキリスト教なら、教義を全うし、世界平和のために、しっかりとリーダーシップを発揮してもらいたい。世界至る所「利己主義」の乱舞。ライバルを蹴落として「俺が…俺が…」の氾濫である。

*

仏教が中心であつたわが国にも、キリスト教の普及はかなり古くから行われていた。私は岩手県の南部、現在の奥州市に生まれた。同市は南部藩ではなく仙台藩であつた。しかし伊達政宗は、徳川幕府のキリシタン禁止令に反し、密かに海外との交易を推進。そして幕府の目を逃れるために、仙台藩の奥座敷(水沢を中心とした現奥州市)に隠れキリシタンを匿っていたらしい。仙台藩士の後藤寿

庵（じゅあん）支倉常長を通じて伊達政宗配下の1200石取り家臣は、1611年オランダの水利工学を取り入れ、胆沢平野の高台平坦地に水を引き、水田開発を推進。同時にキリスト教普及に務めた。後代その流れをくみ、水沢からは、高野長英・後藤新平・斉藤実（第30代首相）など、枢要人物を排出。（天谷翔平……）

そんなわけで、昭和の時代になっても、隠れキリシタンの風習は残っており、私は幼くて何が何だか知らぬ間に、クリスチャンネームを与えられ、母親に、決して人前で、「アーメン」と唱えてはいけない……と育てられた。戦中戦後、厳しい環境の中で私は育ったが、母は、決して他人に迷惑をかけるような人間にだけはなるな……と言つて育ててくれた。が、しかし、私自身、親のしつけを実行できたかどうかは、他人が評価するもの。真に些細な事だが、納豆を食べるとき、その茶碗を洗う人の事を考え、納豆が茶碗に触れないように気を付けて食べる習慣を母から植え付けられた。他人に迷惑をかけない……それを私は、子や孫にも言い聞かせ、育てたつもり。

学校でのいじめについては、いじめっ子の親は、一にも二にも子育てがなっていないからだと思は思う。横浜で、福島からの原発事故避難者の子供に対し、放射線を感染症の病原菌のように取り扱い、ばい菌扱いをしたという。更に原発補償金を貰っているだろう……と、ゲーム代や食事代を小学生の子供から150万円もせびり取っていたという。これは恐喝と同じだ。親はそれを知らないはずはない。いじめっ子は、よく事情を知らず、罪悪感もなく、親の日頃の会話の聞きかじりから罪を重ねたと思うが、これは、いじめっ子が悪いのでは

なく、その親が日頃わが子の教育がなっていないから起きた事件である。それゆえ親は、恐喝罪に相当して然り。そこで国や各自治体は、まず「親の再教育」に全力投球を果たすべきである。私立中学でいじめ事件があれば、いじめっ子は即退学。担任教師も即クビ。そんな話がある中で、公立中学では「知らぬ・存ぜぬ」は、よく聞く話。

*

私は仏教の教えなど、ロクに学んだ事もないが、仏教の根底には、寛大な精神が貫かれている……と聞く。インド→中国→日本とその精神は伝承され、各時代において、国を治める骨格となっていたのである。どこの国も宗教が国民を纏める大きな力になっていると思う。

私は現役時代、国から頼まれ、技術移転という目的で、インドネシアの獣医師を一年間指導した事があった。彼は、れっきとしたイスラム教信者。定刻礼拝など違和感はあったが、礼儀正しい立派な人物であった。ある日は彼に私に言った。日本には神社仏閣は多数あるようだが、国民の宗教心はそれほど強いようには感じられない。宗教なしで国家をまとめているとは、誠に不可思議である……というのだ。言われてみればなるほどその通り。宗教施設や行事は、多数あるが、信心深い人は稀であろう。それを洗脳で国民を操る歴史は、色々あったと思う。明治維新後、従来の仏教を遠ざけ、「神教」で国を操り、万世一系の皇統を祭り上げ、戦争体制を固めていった。挙句の果てが太平洋戦争敗戦の始末。

*

「過労死」。一体これは何事だ。企業とは会社が儲かれば、職員の健康など、どうでもいいのであ

ろうか？ 職員とは、会社の利益を生み出す一枚の歯車に過ぎないのか。ある大企業が、以前にも当局から指摘を受け、改善命令を受けていたにもかかわらず、再び過労死者を出してしまった。ブラック企業は早々に公開すべきだ。日本には、そんな悪徳企業が今なお存在する。1週間の睡眠時間は20時間に満たなかったともいう。中小企業が経営難からやむにやまらず長時間労働を……というのなら、ある程度やむを得ないとしても、大企業が、職員を過労死にまで追いやって、しこたま社内留保を貯め込んでいるなど、絶対に許せない。Karousi は最も不名誉な国際共通語。メイドインジャパンの高品質は世界最高といわれる名譽の陰に、そんな犠牲が伴っているのでは、全く台無しだ。企業も国家も、いや家庭さえも、まず必要な事は寛大な心が隅々まで行き届いている事だ。自己主張を控え、相手をいたわり、感謝の気持ちが満ち満ちていれば、この世に生まれた喜びが倍増する。

「成果主義」や「競争主義」。会社運営にあたり、最も重要な項目ではあろう。厳しい世界情勢の中で生き残るには、より無駄を省き効率よく生産性を上げる。それは重要な事ではあろう。しかし、そこで働く労働者が不眠不休状態では、健全な発展はありえない。少しぐらい儲けが減ろうとも、笑顔が絶えず活気に満ちた職場こそ第一と考える。支えあい痛みを分かち合う。主義主張が多少違っても、行き着こうとするゴールが同じなら、少々の事は寛容の精神で、手を握るべきである。

日本音楽の話

木下明男

Ⅱ 日本音楽の勤労者の理解のためにⅡ

今から50年前、私が20代初め、労音と言う音楽運動に身を投じた頃のお話です。1959年中学校を卒業し、品川区にあるそして、何のために音楽運動を進めるのかの勉強が始まります！そんな時に学んだテキストから…。

4 ことばと音楽

日本音楽の発展を知るには、日本語の発展との関係を知る必要があります。これは、これまで、取り上げられることの非常に少なかった問題です。そこで、まず、究めて常識的なことから考えます。

まえにも述べた通り、労働のない所にことばはなく、ことばのない所に音楽もありません。人間は、労働する個人と個人をことばで結びつけ、それを基礎に、社会生活を営んできました。そのことばから、メロディが生まれ、歌が生まれ、一切の音楽が生まれました。そうして、音楽は、人間と人間を結びつける重要な手段となり、重要な文化となりました。では、これまで、人間はことばにたいして、どういう見方をしてきたか？

ことばにたいする古代人の見方

ことばを研究する学問は言語学です。言語学の歴史がことばにたいする人間の見方の変化をよく示しています。言語学は非常に古い歴史を持った学問です。紀元前4世紀の頃、インドにパーニニという学者が生まれ、当時のインドのことばのサンスクリット（梵語）を研究して、八巻の文法書を作りました。人類最古の文典で、言語学書だといわれています。当時サンスクリットの経文は、神の意思のこもった、この上もなく神聖なものと考

えられ、発音も、文法も、少しでも間違つてはならないことになっていました。そこで、ことばに対する厳密な分析が必要になって、高い言語学を生みしました。実際、発音にたいするパーニニの分析は、今の音声学から見ても、立派なものです。しかし、ここで、つぎの二つのことを結びつけて考える必要があります。

1 はじめに、宗教が言語学を生んだ。

2 当時、経文の多くは音楽のように唱えられ、すでに音楽的な経文の「梵唄」（ぼんはい）も生まれていた。

古代に、宗教が音楽に大きな影響をあたえたことは、前に述べた。当時、ことばも、音楽も、もっぱら宗教の立場から眺められていたわけです。これは、インドに限らず、古代のすべての国がほぼ同じでした。

日本にも、古くから「ことだま」（言霊）という思想があつて「のりと」その他、神を祈る音楽を生み出しました。そういう基礎があつたので、パーニニの言語学は、宗教家の手で中国から日本へ伝わり、あの「50音図」となり、「梵唄」は、各種の「声明（しょうみょう）」となつて、後の日本音楽に大きな影響をあたえました。「聖書」も、「はじめ（天初）にことばがあつた」といって、ことばは人間の生まれる前からあつたように考え、神をたたえる無数の音楽をつくりました。このように、ことばも、音楽も、はじめ、非常に深く宗教の影響を受け、宗教の力で互いに結びついていました。この宗教の影響から、どのように抜け出したかというところが、言語学の歴史であり、音楽の歴史でした。しかし、それには、非常に長い時間がかかり、さまざまの戦いが必要でした。

ことばにたいする近代人の見方

真に科学的な言語学が生まれたのは、19世紀にはいつて、資本主義が大きく発展してからです。童話で有名なドイツのグリム兄弟やフンボルトなどの学者が大きな役割をしました。

これらの学者は、もう、言葉を宗教的には見ておりません。実際に使われている多くの言葉を比べて、其処から共通の法則を見つけ出そうとする、「比較言語学」を打ち立てました。すると、ヨーロッパの大多数の言葉は、共通の要素を持つていて、もとはラテン語から出たものらしく、そのラテン語は、また、ギリシャ語から出たものらしいと分かりました。しかし、一つ一つの言葉は、それぞれ、違った特色をもつていて、フランス語やドイツ語のように、性・数・格の変化の割合複雑なものもあれば、イギリス語やデンマーク語のようにひどく簡単なものもあります。そこで、もとは、にな、ギリシャ語のように、複雑で整然としたものだったが、別れていくうちに、だんだん墮落し、擦り切れて、今のようになったのだろうと考えました。

ところが、こうして資本主義の中心のヨーロッパで発達した言語学が、皮肉なことに、資本主義の一層の発展で、まるつきり逆立ちしてしまいました。19世紀の末から、資本主義が帝国主義の段階に入つて、ますますアジア・アフリカへの侵略を深めると、意外な事が起こりました。イギリスがインドを属領にした結果、サンスクリットに比較言語学の新しい光があたりました。すると、この古代インドの言葉は、今のヨーロッパの大多数の言葉と同系統のもので、しかも、ラテン語やギリシャ語より、もっと複雑な形式を持つているこ

とが解りました。それから、世界各地の言葉の特質が益々明らかになるにつれ、言語学は生まれ変わらなければならなくなりました。

19世紀の末から20世紀の初めにかけて、デンマーク、イエスベルセンが「言語進化論」を唱えました。全ての言葉は、完全なものが次第に墮落したのでなく、内容を豊かにするために、形式の余計な部分を捨てて、段々進歩してきた。つまり、不完全なものから完全なものへと、段々進化してきた、という意見です。これが言語学全体に大きな影響を与えました。

ここに重要な事実があります。それまでの言語学は、事実上、ヨーロッパ中心の言語学で、資本主義の最も発達しているヨーロッパの言葉が、最も優れたものだという考え方が底に深く潜んでいました。つまり、資本主義的な言語学でした。それが根本的に覆りました。世界のすべての言葉は、それぞれ、独特の特色をもつて、しかし、本質的には、同じ本則、同じ方向へ、絶えず進化しているものだという事が明らかになりました。

こうして、言語学にたいする指導権が、資本家階級の手を離れて、労働者階級の手に移らなければならぬ条件が生まれました。私たちはこう考えています。人類のすべての言葉は

- 1 原始後
- 2 民族語
- 3 人類後

この三つの段階を通じて進化するもので、今は、すべて、民族語の段階にあり、それぞれ、原始後の要素を残しながら、単一人類後の方向へ進んでいます。そして、民族語の完成こそが人類後へ進む道で、その民族語完成のために、音楽は最も重

要な役割をするものです。同時に、民族語の完成が、また、音楽を本質的に発展させるという、相互関係にあります。

ヨーロッパ中心の音楽から

同じことが音楽にも起こりました。資本主義の発展と共に、ヨーロッパ中心の音楽の時代が長く続きました。それは、世界の音楽を発展させるのに、大きな役割をしました。しかし、そのために、全世界の民族の音楽に新しい光が当てられ、それぞれの民族の音楽を民族音楽として完成させる事なしには、真に高い人類の音楽を作り上げる事はできないという事が解りました。

こうして、資本主義的な音楽の社会的な基礎が崩れ、音楽に対する指導権が労働者階級の手に移らなければならぬ条件が生まれました。同時に、言葉と音楽が、これまでと違う、新しい結びつきをする事になりました。

5 日本語

日本語をどう見て来たか

すべての国の音楽が、その国の言葉の成長を重要な基礎として、成長・発展してきたように、日本の音楽も、日本語の成長を基礎として、成長・発展してきました。同時に、日本音楽の成長・発展が、また、日本語の成長の重要な基礎になるという、相互関係にありました。

その日本語に対して、私たち日本人はどういう態度をとってきたのでしょうか？この百年あまりの間を振り返ってみても、そこには、二つの極端な見方のあった事が解ります。

一つは、極端な国粹主義、日本語は世界無比の

優れた言葉だという。神がかった考え方で、封建時代の学者や芸術家の見方でしたが、明治以降にも、かなり大きな影響を残しました。もう一つは、極端な外国崇拜、日本語は、ヨーロッパの言葉とは比べものにならない、つまらない言葉だという、極めて卑屈な考え方で、明治以降の資本主義時代の芸術家、とくに音楽家に多かったものです。これは、今も、深く残っていて、日本語では優れた音楽は作れないと信じている音楽家が相当います。

もとより、どちらも間違っています。日本語は、世界無比の特別な言葉でもないが、と言って、決して、ヨーロッパの言葉とはくらべものにならないような、そんな劣等な言葉でもありません。ヨーロッパその他の多くの言葉と同じに、独立した民族語としての特色を備え、長所も短所も持つて同じ法則で、同じ方向へ絶えず成長している、そういう言葉の一つです。それは、科学的な現代の言語学が、具体的な実例で、証明しています。良い音楽が作れないのは、日本語の所為ではなく、日本語を使いこなせない、作曲家の能力によるものです。

日本語について無知で、日本語を愛さなかった

江戸時代の学者、本居宣長(1730-1801)は、「漢字三体考」の中で、日本語について「ことに、他人の発音言語の正しくめでたきこと、また、はるかに万国にまさりて、その音、清朗と清く鮮やかにして、例えばいとよく晴れたる天を日中に仰ぎ見るが如く、いささかも曇りなく…」と言い、「外国人の音は、凡そ朦朧と濁りて、たとえば曇り日の夕暮れの空を仰ぎ見る如く…」と言っています。これは、日本を世界無比の神国と考えた、

極端な国粹主義の現れで従って、始めから日本語を特別な言葉と考え、よその言葉と科学的に比べ、研究して、その本質を明らかにすることができなかったためです。

ところが、明治維新で、資本主義社会に入ると、すっかり逆になりました。明治維新の指導者たちは、ヨーロッパの資本主義に追いつくために、極端な外国崇拜に陥りました。日本語をやめて外国語に取り替えようと言うような、極端な意見が公然とそれらの指導者の中から出ました。それは、国立の音楽学校で、日本の音楽を教えないで、ヨーロッパの音楽だけを教えることにした、その思想と、同じ根から出ています。

地域に眠る埋もれた歴史(21) 木村 進

新年あけましておめでとうございます。本会報も十年を過ぎ10度目の正月を迎えましたが、私は途中からの入会でしたのでやっと半分の5回目の正月となります。諸先輩方のやつと半分であり、こればかりは、なかなか追いつけるものでもありませんが少しでも何か残せるものを見つけて書いていきたいと思います。

玉里地区(1)

玉里村は小川、美野里と合併して小美玉市となりましたが、元は田余(たあまり)村と言っていたという。昭和30年に玉里村となりました。

常陸国風土記の茨城郡の終わりの方に、「郡より東十里のところに、桑原の岡がある。昔、倭武の

天皇(ヤマトケル)が、この岡の上に留まられたとき、神に御食を供へるとともに水部(もひとりべ)に新しい井戸を掘らしめた。この清く香ぐはしい泉の水をおいしさうに飲み干され、「よくたまれる水かな」とおっしゃったので、この里の名を、田餘(たまり)といふやうになった。」(口訳・常陸国風土記より)と書かれています。レンコン栽培の盛んな地域で水辺のイメージが強いが、散策するうちに驚くほど古墳が多く点在していることを知った。今回は古代の跡を追いかけてみた。

1、玉の井跡

常陸国風土記に書かれている清らかな井戸のあった場所と言われるところが玉里大宮神社の山の裏側にあるというので出かけた。

この「玉の井跡」は、神社の一本先の道を入り、道なりに少し行ったところにあった。辺りはのどかな里山が広がっており、春先の時季であったので梅の花も満開であった。

神社の裏山が終わった辺りの低くなった谷のような場所に「玉乃井跡」と彫られた立派な石碑が建てられていた。そして奥に木でできたテーブルとベンチが置かれている。やはり井戸の跡ということで地面は少し湿っている。常陸国風土記千三〇〇年というところで整備がされたようだ。

こうして梅林のようにしているの、訪れる人も増えてくれたらいいなと思う。

2、小舟塚神社(大井戸古墳)

あまり普段は通ることもない高浜から小美玉市玉里地区の先端をぐるっと回る通りを車で通って見た。下玉里から川中子地区に向かう途中に変わ

った形の小山がポコンとあった。



小舟塚神社(大井戸古墳)

この県道沿いにポツコリと膨らんだような小山で、まわりはハス畑で表面の水は凍っていた。そしてこの山の上に神社がまつられており「小舟塚神社」と書かれていた。

どうも山も人工的な感じがしたので調べて見るとやはり古墳(大井戸古墳)だという。前方後円墳であったものが前方部を削られてなくなり、後円部の一部のみになったという。

墳丘長100 m級の旧玉里村最大級の古墳だった可能性があるのでそうだが、築堤工事の土砂採取のため大きく削られてしまったという。

近くの有名な三味塚古墳も削られかけたことがあると聞いているが、何とか貴重な埋蔵物なども見つかり切削を免れたという。

昔は霞ヶ浦も良く洪水を起こしたので護岸工事のため近くの小山などが幾つも取り崩された。

この中には多くの古墳が含まれていたものと思

うと残念な思いがする。神社の祠のところまでの階段を上って見ると、結構見晴らしが良い。

下にはハス畑が広がるが、その先に霞ヶ浦が見渡せる。ここを通る道は、地元の人以外にはほとんど車も通らない道であるが県道194号線(安倉玉里線)だという。この県道は変わっていて、かすみがうら市(旧出島)の安倉からこの玉里地区を通って355号線につながっているのだが、霞ヶ浦の高浜入りのところで道路は寸断されている。

3、岩屋古墳

石岡から355号線を東に進み、小美玉市に入ると街道沿いから少し下ったところに玉里北小学校があるが、この小学校入口への道の途中に少し変わった古墳がある。



岩屋古墳

「岩屋古墳」というが、古墳の中の石棺部と思われる名前の通りの岩で囲まれた「岩屋」が畑の中にぽつんと残されている。たしかここよりも北

の方で似たような古墳があったように思う。

羨道(せんとどう)式と書かれているが、羨道とは墓の玄室につながる狭い通路の事を言うようだ。

奈良の石舞台みたいに大きくは無いが、この岩もかなり大きなしつかりとしたものだ。

内部に彩色や絵などは描かれていない。このあたりも縄文時代の遺跡も出る場所だという。

今まであまり気にしてこなかったのだが、この玉里地区は大きな古墳がゴロゴロしている。

石岡には東日本第二の舟塚山古墳があり、そのすぐ近くに愛宕山古墳がある。そこを延長したところに玉里があるので、古墳はたくさんつながっているように存在するようだ。その中でも大きな二つの古墳を見てきたので順に紹介します。

4、権現山古墳

全長が89.5mの前方後円墳で霞ヶ浦に面した少し高台の山の上にあった。旧玉里総合文化センター(生涯学習センター)コスモス下の古民家園に隣接した駐車場に車を停めて、歩いてすぐ行くことができた。5世紀末から6世紀始めの築造だそう。石岡の舟塚山古墳が5世紀半ばから末頃といわれているのでこちらの方が少し後から造られたようだ。古墳の上には小さな祠が置かれているが上に登る道などは整備されていない。

上にはたくさんさんのドンダリの実がびつしりと敷き詰められていた。舟塚山古墳よりもっと湖に近い。どんな豪族がここにいたのだろうか？

この下の湖に沿った道も何度も車で通っていたが、ここにこんな大きな古墳が眠っていることに気がつかなかった。

5、舟塚古墳

旧玉里村の権現山古墳に次いで大きなのは「舟塚古墳」です。場所は玉里郵便局のところを霞ヶ浦の方(照光寺の方)に少し行った場所で、照光寺の通りの向かい側になる。

この舟塚古墳もかなり大きな古墳で全長が84mの前方後円墳で、権現山古墳の89.5mに次ぐ大きさである。

築造時代は6世紀の半ばと考えられるということで、石岡の舟塚山古墳よりは100年ほど後で、権現山より50年ほど新しいようだ。

どのような豪族がこの辺りに住んでいたのだろうか？

いずれにしても律令制の始まるより前の話で、石岡の舟塚山古墳が茨城国造であった筑紫刀祢(天津彦根命の孫)の墓ではないとも言われている。この辺りの時代はあまり残されている物がなく推察するばかりであるが…。

この古墳も規模からいってかなりの権力者のものだったことが考えられる。

権現山などよりは内陸にあるので時代で段々内陸に寄って来たのであろうか。古墳内部の墳墓の石棺内部は朱塗りされていたようで興味が湧く。

6、雷電山古墳と経塚

この古墳は玉里の旧役場の方から湖岸の方に曲がってすぐ右手に「照光寺」という寺があり、寺の入口を入ってすぐに小山があります。これが雷電山と言われる古墳です。

小山の上にお宮があり、鳥居をくぐって石段を登るようになっています。しかし、5〜6年前の写真を見るとこの鳥居は無いようですので、最

近作られたものようです。若葉の碧がきれいはえて、気持ちがいいです。最近整備したようです。お宮の入口の左右には風神・雷神像が置かれています。これも新しいようです。

石階段の登り口にあった看板に、この「経塚」の説明が載っていました。

経塚は末法思想が流行った室町時代に各地でお経を筒などに入れて、世の中が復活した時まで残しておこうとしたものです。

面白いのはお経を経筒に入れ、更に壺の中に入れて埋めたということですが、この壺が常滑や渥美の焼き物を使っています。常滑は有名なので焼き物は知っていますが、渥美の壺というのはあまり聞いたことがありませんでした。

調べてみると、この渥美の古窯というのは、とても大変なものようです。国宝もあるそうですので、こんなところに何故あるのかが不思議です。

村（今では小美玉市）の文化財とのこと。

鎌倉時代初期ということで、室町より前ですのだから貴重なものではないかと思われれます。

7、モチモチの木

切り絵作家の滝平二郎さんは2009年に亡くなったが、どこか懐かしくなる切り絵の数々はみな素晴らしい。また描かれている山が筑波山であるので、彼はこの茨城の地に縁があるのだらうと思っていた。それが、大正10年に高浜の先の霞ヶ浦沿いの田余（田餘）村（たあまりむら）で生まれたのだと知った。そして石岡一高の前身「石岡農学校」を卒業している。石岡や小美玉では郷土の輝かしい先人として是非いろいろな資料を展示してもらいたい。さて、この滝平二郎さんが挿絵を書いた

「モチモチの木」という絵本がある。

この木のモデルになったといわれる木が旧玉里村の愛宕神社にあるというので出かけてきた。

それにしても素晴らしい木だ。樹齢1000年近くすの太木が横に枝を伸ばして広がっている。もう子供だったらよじ登ってみたくなるだろう。でも簡単に登れるような太さではない。神社はどうやら古墳の上に建てられているようだ。

滝平二郎（たきだいじろう）はこの神社に近いところで生まれた。

5歳の豆太は夜に家の外にある雪隠（便所）に一人では怖くていけない。いつもおじいさんが連れていってくれる。そんな弱虫の豆太がある日おじいさんが急病になり、2km離れたお医者さんへ呼びに勇気を出して出かけた。恐る恐るこの木の脇を駆け抜け、戻ってきたときにこの木に言い伝えられてきた雪明りに木が輝く美しい光景を見る。滝平二郎はきっと自分の記憶に残る思い出を絵本として表現したのだらう。



くすの木（愛宕神社）

ここはあまり雪が降る地方ではないが、この木が輝くこともあるかもしれない。霞ヶ浦も近い。湖面がキラキラ輝く美しい光景がいつも目の前に広がっている。

この愛宕神社は高浜から湖畔沿いに5kmほど行ったところにある。

下から山の上にある神社までは170段程の階段を登る。この神社はかなり古く、この神社の場所には「もち、しい、くす」などの樹叢がその古さを表しており、この小山はやはり古墳だという。

現地看板より

「玉里八館の一つ 愛宕館跡

ここより北東低地の大井戸は、古代から中世にかけて大枝ノ郷（連）と呼ばれ産業・交通の要地であった。この愛宕山古墳を中心として大枝ノ郷を守る要衝として愛宕館があったと伝えられる。大枝ノ郷をめぐっては戦国の天正年間に至るまで、何回かの戦争が起こっている。特に、南北朝時代の延元元年（1336）には北朝方の佐竹義春等の軍と南朝方の春日顯国・楠木家（瓜連城主）等の軍が交戦した大枝の戦いの主戦場となった。愛宕神社もこの兵火に焼かれたという。」

神社と湖畔とのあいだはレンコン畑が続きます。この湖畔から行方方面は桜の木が植えられています。これが立派な木の並木ができたところをサイクリングするのは楽しいでしょう。

8 八幡神社

岩屋古墳のすぐ近くに国道355号線に面して「八幡神社」（はちまんじんじや）がある。

なかなか立派な神社です。旧玉里村の「村社」です。住所は旧玉里村栗又四ヶ（くりまたしか）。

神社の謂れについては説明板などは無く、武士（源氏）の守り本尊の八幡菩薩（八幡様）を祀っていると思われる。しかし、この地域の神社はきつと歴史的にはもつと古そうで、鎌倉時代頃にこの名前になったものかもしれない。

神社の御神木の杉の木が旧玉里村指定の天然記念物表示がされていた。（続）

高須から昔の漁場と今の溜り水を見る

伊東弓子

行方地方に入って出発となる。ここは古墳や常陸国風土記の物語が多い。外海から内海へと運ばれ、古くからの土地の文化と一緒に育ってきた所だと思いが足を入れた。

玉造との繋がりには多くはないが、心に残るものは幾つかある。中学校の時、一年間だけ一緒だった白い頬に笑くぼの可愛い洋子さんは、今どうしたろう。大人達の話しの中に出てきた部落の話しには悲しかった。訳も分からずただ差別する人間の傲慢さが許せなかった若い日。又青年学級の活動の一つに玉造の青年の人達との交流があった。霞ヶ浦を見おろす高台で夕陽を見ながらコーラスをした。何曲も何曲も声高らかに歌った。夢をもち一人一人が元気だった。四十代仕事の壁にぶつかって、心も体も疲れ切っていた時、友が誘ってくれてただ歩いた境内。『金色の小さき鳥の形して…』という銀杏の葉を踏みながら歩いた。あの友は、あの時すでに『御留川のこと』を勉強していたのかもしれない。

その友の誘いでこの高須にこの人あり、と浜田先生のことを知った。霞ヶ浦ふれあいランドで『霞ヶ浦』『御留川』の話しを聞く機会があった。そして差別部落の歴史の話しもここで勉強し、人間社会をより知ることに恵まれた。

歩く会当日は小雨がパラついて不安な出発だったが、そんな心配はどこへやら集まってくださった方は二十人を超えた。気を良くしての出発だった。地元の人々の参加も目立った。

橋を渡る前に右奥に御留川、そして目の前に御川筋、ひろい流れには低い雲が影を落としている。筑波の山は隠れている。橋と右土手は浜田先生が努力されて出来た水辺。左奥に三ツ又沖の水面が広がっている。橋と左土手は、右の先生の造ったものに影響されて出来た水辺だ。

ここで橋を渡ることを強調して言った。協力者と下見してわかった「橋は一キロです。普通に歩いて十五分です」それでも大事をとりたいた人は、一つ松の方へ行って休憩もいいしと、分かれることになった。三分の一は一つ松の方へ堤防添いに、三分の二は橋を渡る流れとなった。歩道は細いので三つ四つのグループになり、浜田先生、額賀さん、石橋さんがリーダーになって歩いた。気がつくくと低かった雲が上がっていくのがはつきりわかり、明るくなっていくのを感じた。三ツ又沖の奥に古渡、浮島が見えた。「国分寺の鐘の音は聞こえませんか」と、声をかけても返事がない。知らない様子だったので一応物語をして、特に地元の人には聞くチャンスをついてほしいと頼んだ。川辺で「オーイ」と大声で呼び舟を出して貰った。旗を立て舟をよぶこともあったという。草が覆い、木立が茂っていた昔も、水辺に住む人が少ない頃、

湖族という一族も勢力を張っていたようだ。途中、田伏の方から歩いてきたグループとも声を交わし合った。若い人とも合った。「何ですか」と、お互いに声を交わした。「水難の碑」をお参りし、Ｕターンする。皆足は軽かった様子。

一つ松は、古い歴史もあって、権力者の保護がなくなった今は一寸お粗末な感じがした。二代といわれている松も黄ばんだ葉が目につく。近くにごみ収集所があるのも感心しない気持ちだ。額賀さんの家はすぐ目の前で大水になった時、町の方へ避難したこともあったとか。家の裏側から栈橋がかけてあって、釣りをしたり、知り合いと飲んだり食べたりする場所も楽しかったという。

祖先八幡太郎義家公が父とこの地に植えた松の話から、元禄二年に領内巡視に來られた光圀公が松守を置いて、毎年肥料を下されたこと、斉昭公が天保五年に水戸藩水軍訓練の時立寄られた時、松の手入れ金としておいていった等、心をかけて大切にしてきた松のようだ。今回の歩く会のチラシ配りの際、何軒かの家に一つ松の版画塗のもの、絵にした人の作品、写真に納めた物などが目に入った。この土地の人達が自慢に思い、家の宝であるかのように目につく所に飾っておくのも、故郷を愛する人々の思いだろう。

川守宅に斉昭公からのいただきものとして大切にされている『拝領摺扇二枚』は、天保五年三月十七日に小川・玉里・玉造地方へ、御巡村の際、鈴木源太左衛門（九代目）宅へ立ち寄る訳であったが、予定が強行軍で寄ることが出来なかった。その後四月五日には、高須崎付近で行われた水戸藩水軍訓練にも立寄られている。こう忙しい予定の中で川守宅へ寄ることの出来なかった詫びに下さ

った物、四月二十一日に郡奉行所に源太左衛門が伺って拝領された物。

高須の家並みは、小高くなった道添いに、川辺は新しい家が疎らに、田側の方は古い家が軒を連ねている。大きな漁をしていた家、分家もあったが、㊿高須川は内水面試験場、ふれあいランド、農協等の梶無川の近辺らしい話を聞いた。地区の中心となる小高い道はもと田と同じ高さだったという。水害の多いのに悩まされ困っていた。時の庄屋、白井小衛門が自費を出して郡奉行と共に堤防を造ったという。文化三年から三年位かかったという。向回の碑も建てられている。江戸時代の絵図に「高須」の名がないのが残念だ。

国分寺の鐘が泣く音を聞いた人を確かめたいと話しをし、やっと二人の人が見つかった。一人は八十歳過ぎのお婆さん喜んで話してくれた。「よく話してくれた。今は昔の話をして耳をむけてくれないよ。よく聞いてくれたね」と、喜んでくれた。雨が降ったり風が吹いたりすると「ガウオーン、ガウオーン」と鳴るんだ。もう一人は

七十代のお爺さんだった。「聞いたよ。ガアツ、ガアツ、とな」二人とも堤防が出来た頃から聞こえなくなったという話だ。どういふことだろう。もともと沢山の人の聞いてみたいと思いつながら又伺うことを約束して別れた。

ふれあいランドの大部屋に自分たちで机を並べ、お二人の話をして頂いた。浜田先生は、庶民的な人柄の方だ。今まで長い間研究されてきた事、活動されてきた事ではなく、長いことかけて出来た霞ヶ浦の背景や御留川が成立していく歴史を話してくださった。額賀さんは生まれ育った玉造のこと、日本農業特に米文化と同じ米文化をもつ東

南アジアの若者と活気ある行動を起こしていこうとして熱っぽい話しだった。二人の先生に充分な時間をとれなくて申しわけなかった。

その後、食事に誘われ、北浦に近い「ふきのとう」というレストランに向かった。ベトナム、日本の料理をいただきながら話しがすんだ。孫位の年齢の若者と話しも日本語の上手なものには驚きと安心が入り交じっていた。中には日本の青年もいて、日本語のより深い解釈をしてあげていた。都内で働いていて月に二度位ここへきて交流し合っている様子が見えてくる。

玉造では霞ヶ浦干拓事業を忘れてはいけない。今は口にもなくなってしまうたあの戦い。今は怒りもしない人が多くなった。広域の大型ごみ処理場も考えることもなく、騒がないことをいいことに進められていく。

【風の談話室】

《特別寄稿》

「落ち穂拾い（3）」

鈴木 健

一 古鬼怒川

縄文海進がピークを過ぎると関東平野の奥まで入り込んでいた海は退きはじめ、その跡に広い湿原ができ、葦が生い茂るようになった。小海川を下っていた古鬼怒川は、最後に今の竜ヶ崎市と利根町の間に広がる湿地に乱入し、霞ヶ浦に続いていた。縄文海退後からその跡地に形成されてきた水はけの悪いこのような軟質地、あるいは沼地を、この地方ではヤワラとかヤーラと呼び、谷原とい

う字を当てている。語源をアイヌ語で見ると、*vat-lara* 【陸・陸の方／水・潮などの引く／低い所】つまり低湿地。その転音ヤハラ→ヤワラ→ヤーラ。谷原村も読みはヤワラ。茨城県に小字名で370の谷原。家和楽でヤワラもカワラも。

二 利根川

今、利根川は川全体を通じてその名で呼ばれているが、古代のそれは、上流部分だけの名称であったようだ。『万葉集』（70年代）では上野国の和歌の中にのみ、「利根川（原文『刀禰河伯（トネカハ）の川瀬もしらず……』（3413）」とその名が出ていて、『和名抄』（930年代）の国郡名にも、「上野国利根止禰」とある。註 コウツケノクニはもと上ツ毛野（カミツケノクニ）と言った。略してカミツケ（上毛）。栃木県は下ツ毛野ノクニからシモツケ（下毛）。連想を避けて毛ノ野にして上野・下野でカミツケ・シモツケというわかりにくい地名ができた。

そのあたりの利根川は水上町の方から南下し、左右から赤谷川、薄根川、片品川などを合わせたのち、子持山と赤城山により川幅が狭められる。このような地形では川水が滞留して沼がでがちである。今の沼田市、『和名抄』にいう利根郡渭田奴末太（ヌマタ）がそこだ。稲作以前のタ（田）はアイヌ語由来、土地とか所のことであった。沼田の田もそうであり、古代の沼田は現在同様に、この地方の中心地で、そのあたりから見た利根川は、沼のような川であったと想像できる。

それはアイヌ語で、*tonopet* 【湖・沼／のようである／川】と言う。北海道にそれを語源とした利根別川もある。そこには沼川を意味する *tonay* 【沼・川】もあった。ほかにも北海道から沖縄にかけてアイヌ語に由来する地名や生活語が多い。

しかし、それをもって日本語の母語をアイヌ語とするのは気が早い。考えられるのは、永いあいだに各地からそこへたどりついた人たちの間で、生きるための共同作業の必要上言語を共通化する欲求が生じ、その結果生まれたのが共通語としての縄文語。当初のそれは生活に必要な短音節の名詞であり、続いてそれをつないだ複音節名詞、次に動詞など、さらに語順は問わずその一連の単語のつながりであったろう。常磐線亀有駅の北に東西南北を冠した碇（イカリ）地名がある。アイヌ語で *ikar-i* 【溢れる／高くある／所】大洪水箇所である。これは縄文語をそのまま引き継いだアイヌ語で解釈できる日本語であった。海石（イクリ）古事記・暗礁、沈石（イカリ）播磨国風土記・暗礁、碇（イカリ）和名抄 伊加里 海中以石駐せ、船のイカリは石であった。水中の石の上を水が溢れるように乗り越えるところにできた五十里（イカリ）ダム（イカリ）。これらも縄文語を基にしたアイヌ語で読解できる古代日本語であった。

最近の人類学で、アイヌも私たち同様縄文人の子孫であることがわかってきた。日本人はその後、外来と混交し、縄文語をほぼ忘れてしまったが、アイヌは純粹にそれを引き継いでいる、ということではなからうか。アイヌ語によって読解できる日本語はもとは縄文語であった。

そこで大胆にも藤代町（現・取手市藤代）を取り上げてみたい。

「この辺は古なべて文間と言ひけり。されば子飼（コカヒ）川（現・小貝川）落口よりあなたを小文間（コモンマ）といひけるによりて文間（フミマ）川の名も起れり。一略（一略）今砥台（トダイ）、川といふに相違なし、その故は文間小文間の間を流がるる川なれ

ば文間川（フミマガワ）に違いなしといへり。」戸田井ノ渡 小文間の内なる戸田井にて蚕養（コカヒ）川を渡る処なり。筑波山東北に見えて景色最良し。相馬日記巻三に、戸田井は小文間の内なれど、堤を隔てて子飼川の川辺に住む田居（タキ）なれば、外田居（トダイ）といへるにやといへるはさる事なるべし。」「書巻（フミマキ）川 常陸の国より落つる蚕養（コカヒ）川の落口なり。土人の説に、文間（フミマ）ノ庄（立木村に文間明神あるより庄の名と為り、すべてこの辺りの地を併せて文間八千石といふ）と小文間の間にて、文間（フミマ）川といへるが誤れるなりといふ。」（赤松宗旦『利根川図志』1858年）。

小貝川を降る船がのんびり小文間にたどりつく、目の前に坂東太郎が悠然と流れている。目指すは江戸だ。明日は競い合いながらいよいよこの沼か湖のような川をさかのぼる。縄文時代からこの川を上流ではトネガワと呼んでいたが、それをアイヌ語に解釈すると、*tonagawa* 【沼・湖の・川】あるいは *tona-pet* 【湖・のうな川】ということであった。参内や内裏はサンダイ・トーダイと読むように、ナイの発音はダイに転じがちである。ここではそれによってトダイ・トーダイと言ひ習わされたとみたい。それに漢字を訓で当てると戸田井になる。先ほどの小貝川を遡る一帯の地名はそのトウダイに音読み漢字をあてて藤代、それを訓で読みフジシロということ、定着したのではなからうか。

三 ミツチ

人々は、はるか以前から葦原の中で適地をみつめては開墾し、稲を作っていた。それを妨げたのは洪水のほかマムシがあった。『常陸国風土記』行

方郡に、継体天皇時代のこととして、「葦原を截い（ギリハライ）、墾闢（ヒラ）きて新に田を治（ツ）りき。此の時、夜刀（ヤツ）の神、相群れ引率（ヒキイ）て、悉尽（コトゴト）に到来（キ）たり、左右（カニカク）に防障（サ）えて、耕佃（タツク）らしむことなし。俗（クニヒト）いわく、蛇（ヘビ）を謂（イ）いて夜刀の神と為す。其の形は蛇の身にして頭に角あり。」とある。このようなことが、あちこちの葦原で起きていた。

くりかえされる洪水のたびごとに、鬼の怒りにも似て荒れ狂う鬼怒の濁流は、無慈悲にも田畑を踏みにじり、丹精込めた作物を奪いさる。

マムシを遣わしたり、雷（厳つ霊（イカツチ））となったり、洪水や旱魃を起こしたりして、稲作を妨げるのは、得体の知れない水つ霊（ミツチ）の仕業にちがいない。土に鋤を入れて自然を破壊し始めた自分たちに対する、そのたたりがちがいない。そういう思いから人々は、その靈魂の怒りを恐れ、ひたすら、その鎮まりを祈り願った。利根町にある立木貝塚の上にそのミツチさまを祭る社が建てられた。やがて社名を蛟岡（コウモウ）神社（岡の元字は虫偏に岡、活字がないので、岡で代用。以下同じ）。祭神を罔象女命（ミズハノメノミコト）（この岡は例外、これが元字）として、格式を整えたそれは式内社に各付けされた。蛟岡とは何か。『和名抄』では、蛟（美豆知、日本紀は大虬の二字を用う。竜の属なり。『山海経』の注に、蛟は蛇に似て四脚なりという、とあり、さらに「水神」もまた「美豆知」と読ませている。一方、罔には、水の精という意味があるという。したがって、蛟岡は、水の精霊あるいは、その姿としての竜蛇ということになる。

四 文間

さて「文間小文間の間を流るる川なれば、文間川（フミマガワ）に違ひなし」（前掲）とあったその文間の由来である。

蛟岡神社のあるあたりは、鎌倉時代から最近まで文間郷（モンノサト）あるいは文間村と呼ばれていた。この重箱読みの理解に苦しむ地名は、蛟岡にその起源をもつ。それは、『利根川図志』に、「虫旁（筆者注 旁（ツクリ）は偏（ヘン）の誤りか）なしに書きたるが、更に転じて文間となりしなるべし」とある。蛟岡の略字として、虫偏を採って交岡としたが、やがて交が似た字の文に変わり、岡が、字形も読みも似ている間に転じた。というわけだ。別解として『大日本地名辞書坂東編』（1912年）は、一一三〇年文書に「蚊虻（ランモウ）」とあることから、それは「即ち文間にして、元は蛟岡を蚊虻に訛り、再度音読して、文間となりしを見る」という。蛟（コウ）は蚊（カ）とまちがいやすい。虫偏がついてモウと読み、しかも蚊と並ぶ字となれば虻（アブ）しかない。ということだ。蛟虻という字があてられ、モンモウと音読し、モンマに訛し、それに文間を当てた。と見るわけだ。いずれにしても、蛟が文に転じ、岡（マウ→モウ）が間に訛ったのが文間である。蛟岡から文間。先人の博学ぶりは、私ごととき文盲のなせるわざではない。それでも、この文間を教訓に若いころ解読した地名を次号で紹介させていただく。

「ご無沙汰いたしました」

田島早苗

元氣だけが取り柄だった私が、去年は右手首を

二度も骨折、追い打ちをかけるように脳内出血を発生、辛い重い麻痺は免れたが右半身に痺れが残し、一年過ぎた今も症状は居座ったまま。

医者が嫌いで薬も飲んでいない、と自分の健康を過信していた付けが一度に押し寄せて来たのだと観念して、血圧計と仲良く暮らす日々を受け入れ、段々重くなる夫の介護もそれなりにこなすスタイルが定着。とは言っても“子供に迷惑は掛けない”と言う自分の信念はもろくも崩れ、娘の家に同居、阿見町の住人になった。

美浦村の住民投票により合併の話が潰えた経緯のある阿見町は工業団地があり、人口が増え続けている。予科練資料館には少年兵たちの失われた青春時代が生々しく展示され、訪れる人々の涙を誘う。

大好きな歴史探訪もままにならない身の上になってしまった無聊を慰めるかのように、娘が図書館で借りてきてくれたファンタジーなど今まで読んだことのない作品を片っ端から読み漁り、多才な作家の資質に出会い、目から鱗が落ちたよう。改めて非才な我が身を思つて、文章を書くのが怖くなってしまった。

丁度もやもやが極限に達した五月の中ごろ、岐阜からすぐ下の妹がお見舞を兼ねてやって来た。これ幸いと、つくばに住んでいる末の妹と三人大洗かんぼの宿へ一泊旅行に出かけた。

夫をショートステイに預けての強行に後ろめたい思いを抱きながらも、末の妹の亭主が運転を買ってくれたおかげで雨もよいの中、終わりのネモフィラを見ることも出来、久しぶりの姉妹の会話も弾み段々心がほぐれてきた。

大洗かんぼの宿は立地条件も施設も最高で人

気も高く、混み合っていた。夕食後部屋でビールを飲み乍ら戦時中の話になった。

終戦の一月前に岐阜が空襲にあった時私は六年生、母の手助けをすることに使命感を燃やしていた。記憶力抜群の妹は四年生、生後十か月の妹は何も記憶のないのが悔しいと言う。母の苦勞を語りながら、文學少女気取りの私に母が「何時か私の一生を早苗が書いて呉れ」と言っていた話になったら、「お姉ちゃん、何も知らない私の為にもぜひ書いて」と下駄を預けられてしまった。

一向に進まぬ終活を抱え乍らも母や妹の声が絶え間なく脳を刺激している。怠惰な私が生きているうちに約束を果たすことが出来るだろうか？

如何なさっているのだろうか、と毎月会報を送りながら案じておりましたが、新春に嬉しいお便りが頂けました。田島姉には、是非当会報に母君の「女の一生」を掲載させていただけます事、楽しみにしております。

《読者投稿》

終活 4

木下いくこ

○母の走り書きより…

冬のよなが・・・家族との語らいや近所の人々との茶のみ話に部落（集落）の昔ばなし（歴史）を語り合うのは、楽しいもの。

わが集落、柴間は庚申講を今も続けている。庚申講の掛け軸に、天明4年、二月吉日柴間村願主講中、とあり3人の名前が書かれている。天明（1784年頃）と言えば、歴史の教科書にある、天明

の大飢饉（全国に一揆が頻発）の頃です。

その頃のご先祖様（私たちの）がどのような思いで、この「お掛け軸」に願いをかけられたか、その叫びが聞こえてくるようです。過酷な労働と年貢に泣きながら、飢えとに苦しみを「むしろ旗」に、かついで訴えた人々が大勢居たのでしよう…。

私がここに住むようになってから、3回ほど「お庚申（護）」に出かけた。3回とも当家（主権者）のお嫁さんのおめでたの時です。古い掛け軸をかけ、その掛け軸（庚申様が仏様が解らない？）に向かってみんなで唱えました。

「おんかあかあ かみさんまえそわか」

「おんあまりやそわか」

「おんかあかあ あびさんまいそわか」
知らない恥をかくからと、母がメモを渡してくれました。その後はご馳走が出て、みんなで一緒におしゃべりです。

○母の走り書きより：

梅干しの唄「私の好きな歌に」梅干しの歌」があります。それは梅の実になぞらえて、女の一生を唄ったものです。「梅が美しく花開き、やがて実となり、塩に漬かって辛くなり、三日三晩の土用干しを経て梅干しとなり、最後のくだりが」
「思えばつらいこの体、9月、10月、秋の頃運動会や遠足に、日の丸弁当になってお供する、まして戦のその時にや、なくてはならないこの体」と言うのです。若き日の逆境の時にこの詩を教えてください、自分で節をつけて唄いました。」

ネットで調べたら、この歌は明治から大正時代にかけて、尋常小学校の国語教科書に掲載されていた。現在もNHKのみんなのうた等で詩の一部を

変えたり、メロディーがつけられたり、続きができたりしながら、歌い継がれているようです。

○母の走り書きより：

ふれあいの里への夢（1985年の投稿記事より）

「八郷町は広い土地に緑も多く、山も多い。この環境を生かし、都会の老人にもこのやすらぎの里を分けてあげたい。ふれあいの里を創りたい。私の温め続けた夢、これこそ理想郷、老人の里なのです。」

「今日も畑で一休みしながら見渡す山々、なんと美しいことか。そして私は目をつむります。老人の里が目と頭に映ります。老人ホームも病院も老人アパートもある。明るい建物と広い庭、山には自然の林に少し手を加えての散歩道。四季折々の花が咲き、あずま屋もある。」

「ふれあいの間では都会と八郷の人が談笑している。竹ぼうき作りを教わっている人もいる。子供と共にの部屋では竹細工、お手玉、麦笛を教えている。数え歌を歌い乍らお手玉遊びをする老人と子供もいる。若者と共にの部屋では半纏の縫い方を習っている。図書室もお茶室も、将棋の部屋もある。」

希望と安らぎの郷、八郷町にこんな施設がほしい。

「今、八郷町では第三次総合計画、希望とやすらぎの郷：やささとピアを構想中。21世紀の夜明け迄あと15年、私は素晴らしいやささとピアをみるこ

とができるでしょうか。」
30年も前にこんなことを思っていたとは、あらためてビックリしました。

私の国府巡り「国司列伝」京都府精華町 今井 直

元横綱・千代の富士の九重親方が亡くなった。

六十一歳の若さで：脾臓癌だったという。現役のころは、軽量ながら均整のとれた筋肉質の体格で、前まわしを引きつけての速攻と豪快な上手投げが惚れ惚れとする取り口だった。優勝三十一回・五十三連勝など、数々の記録を打ち立てた大横綱の引退会見も大きな衝撃だった。目を赤くして言葉に詰まりながら、「体力の限界！…気力も無くなり…以上です！」と、腹の底から声を絞り出したシーンは、今も多くの方の脳裏に焼き付いているだろう。

後日、「没日・七月三十一日付にて千代の富士を従四位に追叙し、旭日中綬章を追贈する」と閣議決定された新聞記事が出た。春秋の叙勲や国民栄誉賞などの表彰は華やかに報道されるが、聞き慣れない「従四位」とは！私は不勉強にも、叙位制度が現在もあることを知らなかった。多くの受章者は官報に記載されるだけらしい。調べてみると、大相撲力士の出身では双葉山の時津風理事長や、先ごろ直腸癌で亡くなった北の湖理事長（享年六十二歳）も従四位に追叙され、昭和の大横綱・大鵬親方には、正四位が贈られていた。

「従四位」は「じゅうよんい」ではなく「じゅしい」が正しいとか。「四」は「死」と同音のため忌み数とされ、「よん・よつ」を用いるようになったのは、幕末・明治の頃からと言われる。現在は位階令により、叙位の対象は「国家ニ勲功アリ又ハ表彰スヘキ功績アル者」で、故人には死去した日にさかのぼって贈られるそうだ。位階は、正一位から従八位まで十六の階級がある。

官吏を序列化する官位制は、六〇三年の冠位十二階に始まり、七〇一年の大宝令と七一八年の養老令により確立した。当時の位階は、一位から三位までは「正（しょう）」と「從（じゆ）」の等級があり、正一位は從三位（じゆさんみ）の六階。四位から八位までは更に「上」「下」に分けられ、正四位上は從八位下の二十階。また最下層の「初位（そい）」は、「大、少、上、下」と四階あり、合計で三十階あった。「少初位下（しょうそいげ）」が最下位だが、「無位」も実質的に位階の一つといえる。無位の下級役人は、大過なく三十年勤めてもやっと從八位下に到達できるかどうかで、なかなか昇進は難しかったようだ。皇族にはこれと別に、一品（いっぽん）〜四品（しほん）の品位（ほんい）が四階あった。例えば、万葉歌人・志貴皇子は二品。天智天皇の皇子で、桓武天皇の祖父だ。当然のことながら、品位は諸王や諸臣の位階と同等には並ばない。

一方、官人だけでなく動物にも叙位されたことが、文献に幾つか見られる。醍醐天皇とゴイサギ（平家物語・巻第五）や、一条天皇と命婦（みよめ）猫（枕草子・第七段）などの逸話だ。（⑧命婦とは宮中に仕える五位以上の女官）古来、昇殿を許されるいわゆる殿上人は、五位以上の者に限られていた。八代將軍徳川吉宗は、はるばるベトナムから取り寄せた象を帝にご覧いただくとしたが、象が無位であるため参内の資格がなく、從四位を授けて参内させたという。拝謁した象は前足をたたんでお辞儀の仕草をし、帝は大層喜ばれたという。

「從五位下」以上の官吏は律令貴族とされ、平城京に貴族は約百二十人、六位く初位の者がおよそ六百人、無位の下級役人は六千人ほどいたと言われる。従って、貴族は官人全体の二％に満たな

い。彼らは田地や封戸（ふこ）といった特別手当が与えられるなど、様々な面で優遇されていた。奈文研が試算した資料（一九八〇年）によると、当時の役人の年収は、正一位が三億七千五百万円、正二位は一億二千五百万円、從三位で七千五百万円、正五位上は二千八百万円、正六位・七百万、正七位・五百万、正八位・三百五十万円だという。いやはや、何たる格差だ！激しい権力争いが起きるのも当然と言えるだろう。

律令制では位階によつて就任できる官職が定まっていた。都や地方の行政機関では、長官（かみ）・次官（すけ）・判官（はんぐわん）・主典（しゅてん）の四等官（しとうかんと）が任務にあたり、定員も決まっていた。国政を担う太政官（たいじょうかん）では、正一位を叙された太政大臣が長官だが、通常は次官の左大臣（さだいじん）と右大臣（みぎだいじん）がその役割を担った。兵部省など八省の長官には、正四位下の者が就任し、長官は民部卿・式部卿など「卿」と呼ばれた。

地方行政では、大宰府の長官が帥（しゅ）（從三位）で、次官は大式（だいしき）と少式（せうしき）（五位）。国司のトップは「守（かみ）」で、武藏・常陸・下総など大国には從五位上の者、相模・讃岐・美濃など上国には從五位下、丹後・土佐・岩見など中国には正六位下、志摩・飛騨・隠岐など下国には從六位下の官吏が、それぞれ都から派遣された。

国司の任期は四年〜六年であった。美濃守・笠朝臣麻呂は、再任を重ね十四年の長きにわたつて国司を務めている。在任中に東山道の難所・吉蘇路（きそじ）の開通や、元正女帝の美濃行幸に功績があつたからだ。元正天皇はこの行幸が大層お気に召され、年号まで「養老」と改めるほどだった。

今年（二〇一七）、岐阜県養老の滝では「養老改元千三百年祭」が開催される。養老三年（七一九）、笠麻呂は按察使（あぜち）に任じられた。数力国の国守（くにのかみ）の中から一人を選任し、その管内の行政を視察・監督する官職である。笠麻呂は尾張・三河・信濃の各国を管轄した。その後、地方官を退任した笠麻呂は、元明上皇（文武天皇と元正天皇の母）の病氣回復を祈願して出家し、沙弥満誓（さみまんせい）と名を改めた。やがて觀世音寺造営のため筑紫に下り、筑前守・山上憶良らと和歌を通じて親交を深めている。

次の国司たちも、笠麻呂と共に按察使に任命された。常陸守・藤原宇合（正五位上）が安房・上総・下総の三国、武藏守・多治比縣守（たじひのあがたもり）（正四位下）が相模・上野・下野の三国、播磨守・鴨吉備麻呂（かもきびまろ）（從四位下）が備前・美作・備中・淡路の四国、備後守・大伴宿奈麻呂（すくなまろ）（正五位下）が安芸・周防の二国を管轄した。

多治比縣守は、第九次遣唐使船の押使（大使より上役）として、阿倍仲麻呂や吉備真備ら留学生を伴い、総勢五百五十七名の大船団で荒海を渡った。この時の遣唐副使は藤原宇合で、翌年全員が無事に帰還。縣守は藤原四兄弟の政權下で順調に昇進し、最終官位は正三位中納言だった。これより十五年前の第八次遣唐使船で渡唐したのが、鴨吉備麻呂。帰国後、從七位上から一挙に從五位下に叙せられた。官吏としてやり手だったのか、世渡りが上手だったのか、異例の昇進である。その後、地方官として下総守・河内守・播磨守を歴任している。

大伴宿奈麻呂は名家の出だ。大伴氏は大和朝廷以来の武門の家柄で、名門中の名門である。大納

言・大伴安麻呂の三男で、長兄は従二位大納言兼大宰帥・大伴旅人。妻は異母妹の大伴坂上郎女（さかのうえのいらつめ）で、『万葉集』に八十四首を残し、額田王と並ぶ女流歌人である。さらに二人の間に生まれた坂上大嬢（おおいらつめ）は、旅人の子・大伴家持の妻となり、家持からすると宿奈麻呂は叔父であり義父にもなる。（上流社会の系譜はややこしい）備後守としての職務上、地元の年端もゆかぬ少女を采女として難波の宮へ送り出すとき、宿奈麻呂が詠んだ歌が、

うちひさす宮に行く子をま悲しみ

留むれば苦し遣ればすべなし

（万葉 卷四一五三）

見るからに可憐で穢れを知らぬ乙女を面接した途端、心からいとおしくなつて胸が締めつけられたのだろう。できることなら、この純真な乙女を欲情のうずまく世界へ遣りたくないが、国守の任務だから仕方ない：壮年の男の心情がにじみ出た歌だ。

天平十八年（746）夏、越中に花の都から新任の国守がやつてきた。越中は都から八日も要する辺鄙な地だが、左遷されたワケではない。大伴家の御曹子・大伴家持、従五位下を叙されたばかりだ。二十九歳の青年は都では要職に就いて人脈も広く、特に左大臣・橘諸兄の信任があつた。折しも東大寺では大仏造立が始まり、その費用捻出のために墾田開発を急ぐなど重大な使命が課せられた。左大臣の期待を一身に担った家持は、不安と緊張に満ちて赴任したに違いない。歴史は越中守の業績を語らないが、赴任して三年後、従五位上に昇叙されている。

越中国府は、高岡市伏木に置かれていた。二上

山（ふたがみやま）を背に、小矢部川が富山湾に注ぐ河口にある港町だ。国庁跡の比定地は、JR氷見線・伏木駅から坂を少し上った高台にあり、現在の地名は古国府（ふるこくみ）。戦国時代に創建された勝興寺境内に「越中国廳址」の石碑が立つ。近くの伏木氣象資料館（旧伏木測候所）辺りが、東館（ひがしだち）という小字名から「越中国守館址」と推定されている。家持は少納言となつて帰京するまでの五年間、ここで暮らしていたらしい。少納言は太政官職の一つで主に侍従の役目をするから、位階は従五位のままでも、栄転である。官吏としての力量を認められたのだ。（④「少納言に栄転」は、『万葉集』巻十九・四二四八の題詞によるもので、正史『続日本紀』にこの記述はない）

この地に立つと、今は民家や倉庫が建ち並んで天平の昔を偲ぶのは難しいが、富山湾をへだてて立山連峰が遠望できる。家持も朝な夕なに眺めた風景だ。少年時代を過ごした大宰府でも、官吏の職に就いた平城京でも、見たことのない大自然——夏だというのに雪を頂いた神々しい山並みに感動して、家持は長歌「立山の賦」（巻十七四〇〇〇）を詠んでいる。家持は上司の橘諸兄と共に、『万葉集』の編纂に関わつたとされ、全四千五百余首のうち、四百七十三首が家持の作であり、その約半数は越中守の在任中に詠んでいる。年齢的にも最も充実し、四季折々の美しい風物に触れ、歌詠みとしてピークに達した時期であつたと思われる。家持の歌から、国守としての日々の暮らしやその人柄が垣間見える。

朝床に聞けば遙けし射水川

朝漕ぎしつづ唱ふ（うた）舟人

（万葉 卷十九四一五〇）

（朝の寝床で耳を澄ますと、遠くかすかに聞こえてくるよ：射水川を朝早く舟を漕ぎながら、唱う舟人の声が）
射水川（いみずがわ）は現在の小矢部川で、家持が寝起きする国守館のすぐ下を流れていた。早朝から漁に出かける庶民の生活を、越中守が耳で感じているのだ。

馬並（なめていざ打ち行かな

洪谿（しづたに）の清き磯みに 寄する波見に

（万葉 卷十七三九五四）

（馬を連ねてさあ、鞭打ちながら出かけようじゃないか。洪谿の清らかな磯辺に打ち寄せている波を見に）

洪谿（現・雨晴海岸）は伏木から氷見への道筋にあり、岩礁が日本海の荒波に洗われる景勝の地である。荒海の対岸には冠雪した立山連峰がそびえ立ち、まさに絶景！家持もたまの休みには国衙の部下たちを誘い、アウトドアを楽しんだのだろう。もののふの八十娘子（やそおとめ）らが

汲み乱（まが）ふ寺井の上の堅香子（かたかこ）の花

（万葉 卷十九四一四三）

（たぐさんの乙女たちが、入り乱れて水を汲んでいる。その井戸のほとりに群がり咲く堅香子の花よ、乙女たちのように可愛いな）

堅香子はカタクリの花。万葉植物を代表する花ながら、『万葉集』にはこの一首のみ。雪解けの頃に桜より少し早く薄い紅紫色の小さな花を咲かせ、その可憐で清楚な姿は春の妖精と呼ばれる。目を細めて眺めている家持の向こうから、キヤーキヤーと乙女たちの黄色い声が聞こえてくるようだ。家持の鋭い感性・豊かな詩魂は、時を超えて心に響く。

帰京後は、橘諸兄が薨去し家持は後ろ盾を失つた。藤原氏の台頭により幾多の政争に巻き込まれ

て、人生の歯車が大きく狂ってしまう。都では閑職に甘んじ、地方官として因幡守・薩摩守・大宰少式・相模守・上総守・伊勢守と、めまぐるしく左遷の憂き目にあった。従五位上から一階級上の正五位下に昇進するまで二十一年もかかっている。四十二歳を最後に、歌を詠まなくなった大伴家持は、六十七歳にして波乱万丈の生涯を閉じた。

(参考文献)『日本史必携』吉川弘文館

伊藤博著『万葉集釋注』集英社

『新日本史料集成』第一学習者

養生日記

堀江実穂

某月某日

ママ友から長男の話しを聞かされた。私に会いに、私の住む町に自転車で来たのだという。アパートの近くまできて、携帯に電話をしたのだそうだが、詐欺電話があった後で、公衆電話や知らない電話番号からは着信拒否されていて繋がらなかったようだ。

寒空の中、長い時間自転車をこいできたのに、悲しい思いをさせてしまった。何かを伝えたかったのかもしれない。子供達とはもう五年あつていない。高校2年になった長男は、どんな姿になっているのだろうか。想像もできない。

何事にも時期というものがあるのだから、その時期が来たら会えるだろうと思っている。

某月某日

少し前に、耳に障害を持っている友人から電話があった。年末にその友人と、その友人で全く耳

の聞こえない人と三人で食事をする約束をした。友人には大きな声ではっきりと話しても、何度も聞き返してくるほどののだが、明るく元気な人である。

私も片方の耳が聞こえないのであるが、日常生活に支障をきたすことはない。なので手話を話すことが出来ない。手話を覚えて、と手話教室に誘われているのだが、なかなか行けないでいる。少しでも大勢の友人を作り、色々な話をしたいと思っているので、時間作って教室に通わなければ。

《風の呟き》

風と戯れて

木下明男

・冬が来た

葉っぱがすべて落ちて冬が来た

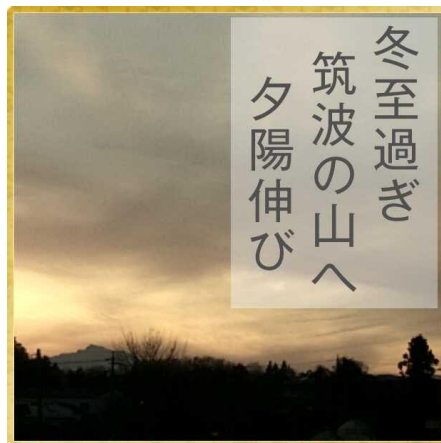
枯れ葉落ち
眺めて感ず
冬の様



・冬至がすぎ

筑波山に当る日がいつの間にか陽がのびている

冬至過ぎ
筑波の山へ
夕陽伸び



・台風なみの

突然の南岸低気圧が暖気を呼ぶ

嵐去り
季節はずれの
暖かさ



殿中刃傷余話

打田昇三

江戸城中での刃傷事件と言えば「忠臣蔵・松の廊下」が知られているが、それより十七年前の貞享元年（一六八三）八月二十八日には若年寄の稲葉正休（いなばまさよし）が大老の堀田筑前守正俊を江戸城で殺害する事件があった。此の場合の現場は廊下とか階段とか中途半端な場所では無くて閣僚の執務室辺りであつたと思う。どうでも良いことだが事件に使われた刀は後代に新撰組の近藤勇が自慢にしていた名刀の「長曾根虎徹」だと言われるから斬られた者は助かりようが無い。

騒ぎを聞いて駆け付けた大久保加賀守、戸田山城守、阿部豊後守など幕府重臣たちが、手つ取り早い解決法として其の場で正休を斬ってしまったので肝心の原因も分からなくなった。知らせを受けて登城した水戸光圀が重臣たちを責めたけれども死者は生き返らないから真相は不明となった。大老も即死なのだが、体裁を重んじる武家社会は面倒なもので、取り敢えず遺体を駕籠に乗せて屋敷へ帰してから幕府が空々しく見舞いの使者を派遣し、その後で息を引き取ったことにした。

堀田正俊は当時の古河藩主であり春日の局の曾孫に当る。江戸屋敷の門前には弔問客が列を成したけれども、稲葉の屋敷には誰も行かなかった。そうした中で水戸光圀は藩主の綱条（つなえだ）を伴って稲葉邸を訪れ、焼香をしたと言われる。死者は平等という光圀の配慮であらう。

原因不明とは言いが幕府の重臣が城中で上司を討つからには余程の事情が有った筈で、一般的には斬られた堀田大老が他人に厳格で自分には寛大であつたから……とも言われる。具体的には徳川家

康が遺言の様に命じていた「軍艦」当時の技術では軍船」の建造を堀田大老が独断で中止させた為とか、家康の命日なのに大老が魚釣りをしていた……とか諸説は有るが、どれが真相なのかは不明の俦である。権力の頂点に居る者は何をしても反感を買ふと思う。その点、余計なことを言えば現代の大老に当る首相はガードが固いので安心して好き勝手な政治が出来るから幸せである。

古河藩主は正俊の子・正仲が継いだが翌年に出羽上山に移封され、大和郡山（奈良市の南）から藤井松平氏の日向守信之が古河に来て、八万石に一万石の加増で直ぐに幕府老中職に就いた。然し半年後に死亡してしまい、跡を継いだ息子は何故か乱心して弟に預けられた。怪談風に言えば「殿中刃傷事件の祟り？」と言う事になる。

崇られる筋合いの無い気の毒な藤井松平家は三万石に減封されて備中庭瀬に移封された。此処は後に「寅さん」の妹婿の実家が有る街として知られるようになるが、幕末には徳川慶喜を支えて大政奉還を実現した板倉勝静（いたくらかつきよ）が領主である。序に触れて置くと此の人の孫か曾孫が三笠宮と協力して日本に於ける「古代オリエント学」メソポタミア文明などを研究する学会」を立ち上げており、更に石岡市に隣接するかすみがうら市の一部、志筑・佐谷地区などを領していた交代寄合・本堂氏は板倉一族が継いでいる。

話を戻すと、堀田大老は徳川綱吉が將軍となるについて最大の功績があつた人物である。綱吉は「生類憐れみの令」を出して庶民を苦しめたが、其れは堀田大老の死後のことである。將軍でも大老には頭が上がらなかったのである。其処から邪推すれば大老暗殺についても裏が有りそうだが、

残念ながら、其れらしき話は残されていない。

矢状稜（じょうりょう）

人類の祖先には、頭のテッペンに「矢状稜」という下顎からの咬筋が付着する固い骨があつた。その矢状稜は頑強で、頭骨をガッチリ固め、内部の脳が膨らむ余地などさらさらなし。それほど頑丈な骨が、なぜ無くなったのか？

現在の成人の頭蓋骨は、脳頭蓋、顔面頭蓋、耳小骨など28個の骨からなる。しかし新生児においては45個である。人類は脳が異常発達したために、出産の折、新生児の頭が大き過ぎて産道を通しにくい。そこで頭頂骨など重ね合わせて体積を減少し、通過し易いように進化した。出産後は成長に伴い、徐々に「骨融合」して強度を増し、最終的に28個に落ち着く。

草食獣など普通の野生動物は、生まれたらすぐ親と一緒に走らなければ、肉食獣の餌食となる。しかし人類は頭が大き過ぎるので、安全出産のため、未熟なまま生まれる。その為、他の動物には見られない「長期保育」が必要となる。人類に最も近いチンパンジーの子供は、生まれたらすぐ親の毛にしがみつけるが、人類の子が体重を支えるほどの握力を持つには、かなりの年月が要る。このように脳の拡大は、多くのリスクを背負う。さて人類の知能は6000年前の頃が頂点であつたとも言われる。人類はほぼ12000年前、それまでの狩猟採集の遊走生活から、メソポタミアで農耕牧畜の定住生活が始まった。すると安定した衣食住が確保されるので、改めて創意工夫の

努力が薄らいでも生きていける。「食」を求めて、縄張りや天敵との闘いで生きるか死ぬかの毎日に比べたら、かなり穏やかとなり、超特急の脳細胞拡大も、ややスローペースになったという事らしい。

そして人類の脳細胞の数は、5歳時を頂点に、減少が始まり、青年期はすでに老齢の境地……と言う学者もいる。しかし知能の秀劣は脳細胞の数だけではない。現在のホモ・サピエンスの脳容積は1450cc。1800ccの痴呆もいれば、ノーベル文学賞のアナトール・フランスは1000ccであった。細胞数は減少しても、細胞同士の手携が潤滑なら、素晴らしい活動効果を生み出す。5歳の大脳を、いかに磨きぬくか……である。

さて本論。人類の祖先を辿るとホモ属（ヒト属）の直前段階で、今から200万年〜400万年前に生存した化石人類アウストラロピテクス・ロブストスの頭頂部には、正中線に沿って「矢状稜」という骨が存在した。現在ではゴリラの雄に見られる。この矢状稜は頭蓋骨を頑丈に固めているため、頭蓋内で大脳が拡張するためにウズウズしていても、拡張する事ができなかった。所が人類の祖先は、智慧や道具を発達させ、食べ物も熱を加えたりして柔らかくなると、強力な咬筋は不要となり、その付着する矢状稜も不要となった。当然、屋根の重しが取れると、大脳は一気に拡大を始めた。大脳は時間と並行して膨らんだのではなく、ある時期から急速に膨張したのである。

所が私に言わせると、人類は大脳を膨らまし、有頂天になり自然との調和を忘れ、今の今、自分達の生活が楽になればそれでよいとする安易な習慣がはびこり、植物が何十億年もかけて作った酸素原子によるオゾン層を破壊し、太陽からの紫外

線でDNAが壊され、皮膚がんなどで悩むハメとなった。生命の安定的持続を妨害するような環境破壊や、枯渇するまで資源を略取する。要するに今の今、俺さえよければそれでよい。これでは万物の霊長などとは到底言えない。利己的な遺伝子に支配され、欲望を満たすため侵略や戦争さえ避けようとしないう。人口コントロールもままならず、子孫の安定生存を妨害するような行動が目立ち、自然破壊を抑制できない。恰も種の寿命を縮めるために全力投球している感じ。ゴリラは真に温厚な動物であるが、人類は仲間同士殺し合いをする真に愚かな動物である。それゆえ私は、膨らみ過ぎた人類の大脳を「毒饅頭」と名付けている。

【特別企画】

打田昇三の私本・平家物語

巻五、(三、一)

平家の興亡を物語る「平家物語」は平家側の視点で書かれていて当然なのだが、是までの章段は栄華を極めた平家のことが物語の中心であったけれども、今回からは「四面楚歌（しめんそか）周りは敵ばかり」とまでは言えないにしても平家に敵対する勢力の数が多くなってくる。巻一の冒頭に「奢れる者は久しからず」と書かれているから平家側も覚悟は出来ていると思うが、見え無い敵が何処にどれ程の勢力で居るか分からない状態に追い込まれ、いらだつ平家の姿が描かれる。必然的に物語を展開する視点が平家側から敵対する勢力の側にも移ってくるのである。

前章段では、荒くれ坊主の文覚が何処で拾ってきたか分からない頭蓋骨を見せて源頼朝に決起を促した。それに騙されたのか騙されたふりをしたのか頼朝は平家打倒の兵を挙げる決心をする。そして今回の章段では頼朝挙兵に激怒した平清盛の命令で、早くも平家の大軍が反乱軍討伐を目指して富士川に現れる。源平対立の始まりである。

それはそれで良いのだが、実は怪しい坊主の文覚に騙されるまでも無く、源頼朝の許には平家の失政に関する情報が早くから正確に伝えられており東国に居て平家全盛時代の恩恵に浴することのない武士たちも、決起の盟主として擁立する源氏の御曹司にそれとなく何かを期待し始めていた。

源頼朝が伊豆に挙兵し、手初めに平家の一族で伊豆に居た山木兼隆を討ったのが治承四年の八月十七日であるが、それより二か月ほど前には都で宮中の下級官僚として勤務していた三善康信が休暇でも貰ったのか、遙々と伊豆にやってきて頼朝と対面し「以仁王の令旨を貰った源氏系の者は全て追討する（平家）が」という噂が有ります。貴方は源氏の正統ですから特に危険です。早く此処を出て奥州にでも身を隠されたほうが宜しいと存じます」と忠告をした。康信は、頼朝の乳母で有った女性の甥なので常に都の情勢を頼朝に知らせていたが、緊急事態を報告に来たのである。

頼朝は逃げようとも思ったが「窮鼠却つて猫を噛む（追い詰められた鼠が猫に逆襲する）」という諺（ことわざ）を思い出し無謀ながらも平家を討つ決心を固め、取り敢えず自分の身の回りの世話をしていた藤九郎盛長（頼朝の乳母の娘婿）を使者として、心当たりのある武士たちに立候補予定を知らせていた。事前運動である。その結果、北条、佐々木、宇佐美、土屋、土

肥、岡崎などの地方武士が味方に付いてくれたので百騎に満たない兵力で平家討伐の旗挙げをしたのである。

富士川（ふじがわ）のこと

軍事上の作戦は秘密であることが必須条件であるが、第二次大戦中の日本はこちらの情報が漏れ放題敵の動きは例えばソ連軍の満州侵攻など北欧から情報が入っていたのに政府が「日ソ不可侵条約」を盲信して何の対策も講じなかったと言われるから「大日本帝国」ではなくて「怠日本低国」であったのかと思われるような対応になった。

それに比べて立派だったのが平清盛を頂点に据えた平家一族で「伊豆に起こった小規模な反乱が勢いを増さない中に先手を打つべし」と小学生でも分ることを大勢の公家を集めた会議で決め、遠征軍を派遣することにした。まず、大將軍には小松権亮少将維盛（こまつこんのすけしやうしやうこれもり）皇后付き、兼ねて近衛少将、平重盛の嫡男）、副將軍に薩摩守忠度（さつまのかみただのり）清盛の異母末弟）が充てられ、都合三万余騎の軍勢が九月十八日に都を發った。翌日には一旦、京都に寄り、二十日に東国へ出發したと原本にあるが、実際には出陣式など、どうでも良いことで時間を取られて京都發が九月二十九日であったらしい。その頃、頼朝は鎌倉に来ていた。

大將軍という大役を押し付けられた維盛は二十三歳、平家の嫡流で平家物語原本に「整った容姿と礼義に叶った身のこなしが絵に描いても描き切れない」と書いてある。歌舞伎でも有れば拍手喝采を受けるであろうが、合戦に行くには見掛けよりも頑丈な方が良いのだが、武士として晴れの舞台であるか

ら平家伝来の鎧唐皮（よろいからかわ）という総大將用の鎧を着けるところ、重いからケースに入れて是を家来が担ぎ、本人は赤地錦で織った垂れ付きの軽い鎧を着て連銭韋毛と言う模様つきの毛並みを持つ頑丈そうな馬に、黄覆輪と言って金で縁取りをした鞍（くら）を置き悠然と乗っていた。歌舞伎役者のように…。

一方、副將軍の薩摩守忠度は紺色の錦と黒系統の糸で編んだ鎧を着て、大將の惟盛とは逆に地味な色の武装で健康第一のような黒馬に、それでも金粉を撒き散らしたような鞍を置いて乗っていたのだが、馬から武器から鎧兜から全てが太陽に当たると輝くように見えたので、是もまた見物人を喜ばせていたのである。合戦に行くのであるから見掛けはどうでも動き易い服装が大事だと思うが…。

この人物は役職を見ても分かるけれども、清盛の一番下の異母弟なので平家一門でも「冷や飯食い」に近い立場に在ったようで、どちらかと言うと武將よりも歌人として知られていた。原本には出陣前の忙しい時期にする話でも無いが、愛人との艶話を載せているから紹介しておく。

忠度は宮中に仕える或る女房の許に通っていたのだが、此の女房は皇女の子として生まれながら運が悪かったか、父親が一流で無かったか、皇族になれなかったのである。或る時に忠度が逢いに行くと生憎、女性の先客が有り、その客が皇族で二人は夜が更けても話が弾んで帰ろうとしない。

忠度は軒下で待つて居たのだが「早く客を返せ」という合図に扇子をパタパタ鳴らした。女房は客の手前「かしがまし（うるさく）野もせにすだく（鳴く）虫の音や我だに物は言わでこそ思へ」という古歌に因んで「野もせにすだく虫の音よ」と客には言い訳

し、忠度には下の句で「今夜は無理かも知れません」と優しく言い訳したのである。

忠度は諦めて帰ったのだが、その後二人が逢った時に女房が「あの時に扇子を鳴らすのを止めて帰ってしまったのですね…」と言うと、忠度は「虫の音（扇子の音）がうるさい…」と言う仰せだったので…と古歌の上半分だけの意味しか採らなかったことを明かした。その様に気の利いた女房であったから、今回の東国出陣に際して、着替えの下着類を送り、遠方へ旅立つ別れの悲しさを一首の歌に詠んだ。

「あづま路の草葉を分けん袖よりも立たぬ（都に残される身の）袂（たもと）の露ぞこぼるる」

これに対して薩摩守は、次のように返歌をした。

「わかれ路を何か嘆かん（此の別れを嘆くを）越えて行く関も昔の跡と思えば（思い出しよう）」

此の歌に「関も昔の跡」と詠んだのは其の昔、祖先である平將軍貞盛が平將門追討の為に官職を辞して東国へ下向したことを関連付けて詠んだのであろう。優雅で有ると人々は感心した。

朝敵となった者を平定するために都から離れた地に向かう將軍は、先ず宮中に参内して天皇から節刀（指揮権を与えられた印の太刀）を賜わるのだが、その時には天皇が南殿にいられて近衛府の役人が階段の前に陣を敷き、公式の儀式に主席と次席を勤める大臣以下の公家たちが参列して規模で言えば中規模六位の者以上が出る程度の式典が行われる。（戦場に行くのであるから、くだらない式典など開いていないで、サッサと行け！）

大將軍と副將軍が礼義を正して節刀を受け取る。先例としては承平・天慶の乱の対応が挙げられるけれども、是が古すぎるので天仁元年（一一〇八）に源義親（八幡太郎義家の子）が反乱を起こした際に当時、

讃岐守であった平正盛（清盛の祖父）が出雲国に派遣された例に倣って「駅鈴（えきいり）」が与えられた。平家軍は是を袋に入れ、家臣が首に掛けて関東へ下って行ったのである。

駅鈴と言うのは、途中で人夫や食糧などを徴発出来る権限を与えられた印であり、遠征する者に天皇から下賜された。東海道の終着駅であった石岡には其の駅鈴を祭祀した神社が在るのだが、余り知られて居ない。さすがは「歴史の里」である。

古来、朝敵を滅ぼそうとして都を出る將軍は三つの心得が必要と言われていた。それは節刀を賜わる日に家を忘れ、家を出る時には妻子を忘れ、戦場で敵と戦う時に身を忘れることである。源氏討伐に向かった平家の大將・維盛及び副將の忠度も此の様な事は知っていたであろうけれども思えば戦場に向かう苦勞は氣の毒なことである…。

平家も滅亡が近くなると余計な事を言われるもので幾らお坊ちゃんでも武將であるから其のぐらゐの覚悟を決めて出陣をしたのであるが、やがて源氏軍と遭遇した平家方は見事な負け方をする。その原因は実際に軍を動かしていた幕僚にあったので、落ち目になると全てが上手くいかない。

一方、出征部隊が何かと苦勞をしている頃に、都では新院と呼ばれた高倉上皇が安芸の国の厳島神社へ参拝に行かれた。其の年の三月に行かれたばかりなのである。その御利益で世の中が平穩であったところ、以仁王の謀叛で世の中が乱れたので「天下が静まるように」祈願されたのであろうが、実は悪化していた高倉上皇自身の病氣が治るようお願いに行ったらしい。かなり病状は進んでいたもので、行くのは神社よりも病院の方が先で有ろうとは思いますが：今回は京都からでは無く福原（神戸）からなので長旅

にはならなかった。

厳島神社には願文を奉納したのだが、字が下手だったようで撰政の藤原基通に清書させている。願文やテストは自分で書かないと採点の対象にならないとは思ふのだが：病氣平癒の願文は尚更である。その願文には次の様に書かれていた。

「聞くところによれば、宇宙は雲が静かで十四、十五の月は高く晴れ、厳島明神は知恵深い神であられる。陰と陽との風が傍らに吹く厳島神社は、その名が知られているように、その御利益が他に比すべくも無い靈驗を顕される。高い峰が社殿を取り巻き、大海が近くに及び空が開けていることは自ずから広大なる仏の慈悲を表している。

それを思えば（私は）凡庸の身を以て皇位に就き、今は（退位して）自適の暮らしを送るようになった。そこで、密かに厳島を訪れ社殿にひれ伏して神仏の恵みを祈ると共に、畏れ多くも御神託を頂き、そのお告げに従つて是から生きようと決意したのだが夏の終りから秋にかけて病いに冒され医師にも治すことが出来ないと言われた。

月日はいたずらに過ぎて、病氣の苦は去らず神仏に見放されたと思うようになった。然し、是ではいけないと欲望を払い除ける修行をすることにした。そこで寒風が吹きすさぶ中で或いは微かな日差しの下で、衰えつつある視力を頼りに一心を以て經文を書写した。（是は眼病にはマイナスである）その様にして色紙に記した妙法蓮華經（法華經）一部、無量義經と普賢觀經、さらに阿弥陀經、般若心經各一卷、金泥で書いた法華經の第十二番などを奉納する。

時に松や柏の葉が善根を生み、波音が空に木霊こだまして仏の賛歌に聞こえると言う。仏の弟子である自分（高倉上皇）は宮殿を出てから八日間、多くの

年月を経た訳では無いが、西海の波を凌（しの）ぐと二度、この厳島で仏の導きを得て、因縁の浅からぬことを感じている。朝に祈る者の御利益は一に非ず、夕べに御利益に感謝して参詣する者は尚更である。然しながら、身分の高い者の帰依は多いと言っても院又は宮の参詣は未だ聞いて居らず、後白河法皇が初めて、それを実現された。私は取るに足らぬ身ながら、其の志を継ぎ、此処に参詣する。

中国の伝説によれば五嶽と言われる崇高山（河南省の山の月の前には、漢の武帝が神仙を求めて登つても仏の姿を拝することが出来なかったとか、仙人が住むと言う東方海上の仙郷・蓬萊にも仙人の影を求めることが出来なかったとか…。仰ぎ願わくば大明神、私の願いをお聞き届け下さりますように、此処に一乗經を丹念に書き表わして奉納致します。御加護を垂れさせ給え…。

治承四年九月二十八日 太上天皇

高倉上皇は平家が信仰する厳島神社に、言わば個人的なお願いで参詣したのだが、平維盛を大將軍とする平家軍のほうは、遙々と都を発つて遠い東国へ遠征したのである。原本には「千里の東海」と書いてあるが、距離数としては五百キロぐらいである。それでも兵隊は歩いて行くのでかなり疲れる。ましてや行く先が戦場であるから生きて帰れる保障は無い。原本にも「誠に危うき有り様」とあるが、或いは野原の露草に宿を借り、或いは高台の苔に寝て、山を越え川を渡り、十月十六日には駿河国清見が関（興建）に到着した。

都を発つた時には三万余騎の軍勢であったが、途中の国々から集めた兵が加わり数だけは七万余騎に増えていた。一本の道を進むのであるから、先頭は蒲原付近・富士川を渡るのに後備の軍は三十キロも

離れた静岡市の手前で安倍川を渡るか、どうかの位置関係である。

敵地が近くなったので大將軍の平維盛が侍大將の上総守忠清を呼び「足柄山を越えて敵地の坂東（足柄山・碓井峠から東の諸国＝関東地方）で戦をしようと思う…」と逸つて言つた。すると忠清が「福原（平家館）を発つ時に入道殿（清盛）の仰せでは『合戦のことは忠清に任せる』」とのことでした。坂東八か国の軍勢が皆、兵衛佐（頼朝）に味方しているので、敵は何十万騎と言う数でしょう。平家軍は七万余と言つても来る途中の諸国から借りて来た軍勢です（平家直属の軍勢は多くありません）その上に、味方の馬も人も長旅で疲れて居ります。近くの伊豆・駿河の軍勢が未だ到着して居ませんので、今は富士川を前にして応援の軍勢が来るのを待ちましょう」と、部下の意見と言うよりは自分が指揮官のような口調で答えたので維盛は黙っているしか無かった。結局、進軍を続けて来た平家の大軍勢は、何の情報も無い俣に富士川でストップしてしまつた。

一方、源頼朝は足柄山を越えて駿河国に入り、現在の御殿場線に沿うように流れる黄瀬川の岸に陣を置いた。其処へ甲斐・信濃に居た源氏（新羅三郎義光の系統）軍が駆け付けて一つになった。軍勢を富士川と黄瀬川の間にある砂丘地帯に集めてみると平家が見積もつたように二十万騎の大軍になった。平家の予測は当たっていたのだが何の役にも立たない。その頃、少し西の街道筋に居た平家軍陣地の前を常陸国の源氏である佐竹太郎忠義の家臣が通りかかつて上総守忠清に見つかった。

佐竹は甲斐源氏などの本流筋になるのだが幸か不幸か、当時の主が都に居て平家に仕えていた。

一族の一人が故郷に帰っていて、都で馴染んだ女

房に宛てた手紙を家来に託したのである。忠清が調べても普通のラブレターであるし、佐竹は平家方に加わっているのです、使いの者は直ぐに通行を許されたのであるが、其の際に「（来る途中で見たであろう）源氏の兵力はどの位か？」と尋ねると「私が通つてきた八日か九日かは掛かる道筋の野も山も海も川も源氏方の武者で埋まっています。私は少ない数の計算しかできませんので多いのか少ないの知りませんが、昨日、黄瀬川の辺りで聞いた噂では源氏の軍勢が二十万騎とか言つておりました」と答えた。是を聞いた上総守は「ああ、何と言うことだ。大將軍（維盛）がノンビリしているから悔しいことになった。今日も早く、せめて先手の部隊でも派遣しておけば、足柄山を越えて関東に攻め入ることが出来て、其処に畠山の一族や坂東八平氏の大庭兄弟などが駆け付けて来たであろう。是が実現していれば坂東は平家に従わない者など居なくなつていたのに…」と後悔をしたが後の祭りです。今更、どうしようも無かった。

侍大將の上総守忠清は他人ごとのように大將軍を非難したが、平家軍の先頭が富士川に到着した時に先へ進もうとした維盛を止めたのは、忠清なのであるから、是は誰が見ても参謀長・上総守忠清の責任である。この状況は平家と言う巨大化した組織の中で、忠清のような無能な番頭上りの武士が権力を持ち、若い主人を越えようとする。

いわゆる「下克上」の魁（さきがけ）のような徴候が平家内に現れたことも没落の原因の一つかと勝手に考へている。

大將軍の維盛は、東国の事情に詳しく今回も案内役として来ていた斎藤別当実盛（さいとうべつどうさねもり）源氏に付いていたが、後に平家に従つた武蔵国の武士（を）呼んで聞いた。「そなたのように強い弓を引く武士が関

東の八か国にはどのくらい居るのか？」すると実盛は笑つて答えた。

「君（維盛）は、此の実盛を強い弓を引く者と思われておいですが、私は僅か十三束（標準が十二束で約八十三センチ）の矢しか射ません。私程の者は坂東八か国には幾らでも居ります…大矢（強い弓を射る武士）と呼ばれる者は十五束以上を引くのですが、その強度は頑丈な者が五、六人でないと張れないような弓です。この様な武士が射た場合には鎧の二領（鎧を数える単位）や三領を重ねても容易に射通してしまいます。大名と呼ばれる者は、少なくとも五百騎以上の武士を従えており馬に乗れば落ちることを知りません。どの様な悪路を走つても（操縦を誤つて）馬を倒したり馬から落ちることは無いのです。」

その様な武士は戦場において親が討たれようが子が死のうが顧みることもなく、その遺体を持ち越えて戦いを続けます。それに比べて西国の場合は親が討たれれば先ず懇（ねんごろ）に弔つて喪中は供養に専念し、喪が明けてから改めて攻めてゆきます。子が討たれれば悲しみの為に戦いをしません。合戦用の食糧が少なくなれば春は田植えをし、秋は米を収穫してから合戦をします。夏は暑いと言い、冬は寒いと言うので合戦を嫌います。（合戦に対する考え方が消極的です）

其れに対して東国の武士は全て違います。合戦には何事を捨てても全力で向かつて来ます。特に甲斐や信濃の源氏軍は、此の一帯の地理を良く知つて居ますから富士の裾野の地形を利用して平家軍の正面には現れず、背後や側面から攻撃してくると思われれます。この様なことを申し上げると、大將軍を気後れさせようとしているように思われてしましますが、私は合戦が軍勢の数に依るのでは無く、謀略

（作戦）で勝負が決まる……と言う事を申し上げたかったのです。この実盛は自分も高齢ですから、此の度の戦いを最後の合戦と心得て生きて都に帰ろうとは思っていません……」

老将の言葉にお坊ちゃん大將軍は感嘆したのだが、是を聞いた平家軍の兵士たち、特にアルバイトで遠くまで連れて来られた者たちは震えあがって驚いた。この段階で既に平家軍勢は負けている。斎藤実盛は此の後で参謀長の藤原忠清と作戦上の意見が合わず、戦場を離れてから北陸方面に行き木曾義仲の軍と戦い戦死を遂げる。（巻第七）

平家軍が富士川を前にして中途半端な時間を過ごしている中に対岸には源氏の先陣部隊が集結を完了して治承四年十月二十三日には両軍の間に「合戦開始」の条約が結ばれた。平家物語には書いて無いが源氏軍が合戦開始の日時を打ち合わせに行ったのに平家軍は答えなかったらしい。其の時に平家方の藤原忠清が道義に反して源氏方（武田）の軍使を斬ってしまったとも言われている。是を見た平家方の兵士、特にアルバイトで雇われた者は恐ろしくなった。その夜に平家の陣から源氏軍の居る方向を見渡したところ、伊豆や駿河の人々が合戦の噂に恐れて野や山に疎開を始め、其処で炊事をする火や灯りが大勢の軍が集結しているように見えた。兵士たちは「何と源氏軍の多い事よ。野も山も海も川も源氏軍ばかりではないか！」と恐怖心が先に立って怯（おび）えていた。それに斎藤実盛先生の「東国武士」についての講話が加わったから生きた心地は無い。

その明け方に富士山麓愛鷹山の南麓に在る浮島の沼に居た水鳥が、何に驚いたのか一度にわっと飛び立った。その羽音が辺りに響いて、ことさらに大きく広がったから、是を聞いた平家の兵たちは頭から

敵だと思い込んだ。「是は源氏の大軍が押し寄せる。斎藤別当が言っていたように正面の大軍と共に裏手にも敵が来るに違いない。取り囲まれてからでは遅い。此処は一旦、退いて木曾川から洲俣（揖斐川・長良川・木曾川の合流地点）にかけて防ごう……」と誰言うことなく退却を始めた。

騒ぎは大きいのだが誰が退却の命令を出したのか誰も知らない。「とる物も取り敢えず」と言うが慌てているから弓を持っても矢は持たず、或いは矢を持って弓を忘れ、他人の馬に自分が乗り、自分の馬には他人が乗り、杭に繋いだ馬に乗って旋回するだけの者など戦場でも無いのに地獄の様な大騒ぎを展開していた。特に平家陣営では戦場間近というのに近くの宿場から、その筋の女性たちに出張サービスをさせていたから、取り残された遊女たちが逃げる武士に押し倒されたり、馬で蹴られて腰の骨を折る大怪我をさせられた者もあり、妙なところで被害者が出た。

源氏軍の方では武田信光が敵の奇襲攻撃に備えて間道沿いに平家陣営の裏に移動を始めていたのである。「日本外史」では、それに驚いた水鳥が飛び発ったために平家の兵が逃げ出した、としているが、どちらにしても、非は平家側にある。

翌、十月二十四日の朝、源頼朝が率いる源氏の本隊約二十万騎が富士川の戦場に到着して天地に響き、大地を揺るがすような「関（とき）の声」を三度も挙げたらしいが、既に平家軍は一人も残っていない。次の章段は、この一方的な合戦に対する都での事務処理（恥さらし）の話になる。

（続く）

明けましておめでとうございます。 本年も宜しく願いいたします。

ふるさと風の会では、「ふるさと（霞ヶ浦を中心とした周辺地域）の歴史・文化の再発見と創造を考える」仲間を募集しております。自分達の住む国の暮らしと文化について真面目に考え、声高くふるさとを語り、考える方々の入会をお待ちしております。会の集まりは、月初めに会報作りを兼ねた懇親会と月末に雑談：勉強会を行っております。

○会費は月額 2,000 円。（会報印刷等の諸経費）

※入会に関するお問い合わせは下記会員まで。

白井 啓治 0299-24-2063 打田 昇三 0299-22-4400

兼平智恵子 0299-26-7178 伊東 弓子 0299-26-1659

ふるさと風の会 <http://www.furusato-kaze.com/>

編集事務局

〒315-0001

石岡市石岡 13979-2

TEL 0299-24-2063

<http://www.furusato-kaze.com/>